月刊 FALCOM MAGAZINE
Vol.22



最高の「兄」とは何だ!?
みんな集まれ！ファルコム学園

遊撃士協会から支援要請!? あの方を護衛せよ！
英雄伝説　零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～

ぶつかり合う《漆黒の牙》と《剣帝》
空の軌跡外伝 レーヴェ物語

『SC』編が始動!? ジェニス王立学園の怪奇現象にドロシーが挑む！
英雄伝説　空の軌跡 リベール王国スナップショット

Falcom FanArt Collection

ファルコム jdk バンド ドラマー・オカジの
人生半キャラずらし

ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏

『英雄伝説 零の軌跡』特別読み切り漫画
ワジvsヴァルド！ 空前絶後のホスト対決!?
『ミシュラムNo.1ホスト決定戦！』 甘酒



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

英雄伝説 零の軌跡
～午後の紅茶にお砂糖を～

著：むらさきゆきや
イラスト：窪茶



第8話『クロスベルの休日』

西ゼムリア通商会議。

ディーター・クロイス新市長の主催した経済関連の国際会議で、帝国、共和国、リベール、レミフェリアの首脳が一堂に集まった。

自治州クロスベルの未来を決める大切な会議だったのだが、各国の思惑が交錯して事件が起こり、友好的とはいえない雰囲気での幕切れとなってしまった。

大きなうねりに呑みこまれ、クロスベルの街は緊張に包まれている。

それでも、俺たち特務支援課は、目の前で困っている人たちの為に全力を尽くす。

いかに小さなことであろうと、その積み重ねこそが、クロスベルの内外にある〝壁〟を打ち砕くことに、繋がってると思うから……

「おつかれさま、ロイド。式典は緊張するわね」

パールグレイの美しい少女、エリィが声をかけてきた。

特務支援課の頼れる才媛であり、マクダエル議長の孫娘である。

「ああ、本当だな。でも、エリィはこういうのに慣れてるんじゃないか？」

「祖父の仕事柄、フォーマルな場に呼ばれることは多いけど、だからといって慣れるものじゃないわ」

「そういうものか」

エリィの様子は、すっごく落ち着いているように見えたが……あれでダメなら、俺なんか、よっぽどそわそわして見えたんじゃないだろうか？

「さすがに、各国のトップともなると、あんな事件があっても堂々としたものね」

「ああ、大したものだよ」

俺たちは式典会場である空港を後にする。

今日は、エレボニア帝国のギリアス・オズボーン宰相と、カルバード共和国のロックスミス大統領の帰国を見送る式典があった。

特務支援課が通商会議の警備に携わったので、その代表として、俺とエリィが参列したというわけだ。

「ねえ、ロイド。このあとは用事ある？」

「いや……そういえば、セルゲイ課長から午後は休むように言われてたな」

時計を見ると、もう午後一時だった。

「通商会議の前から、ずっと休みを取ってなかったものね」

「仕方ない。会議中は他の支援要請を受けられなかったからな」

歴史的な会議が開かれて各国のトップが集まるとあって、大勢の外国人観光客が訪れ、市内では細かいトラブルが急増していた。

逆に、警察も警備隊も要人の警護に追われ、街の治安維持は後手に回ってしまった。

「市民のことは、遊撃士たちが気を遣ってくれたみたいね」

「そうみたいだな。いつもありがたい」

「本当ね。けれども、また警察が仕事してない、って街の人たちに言われちゃうわね」

「うーん、今回ばかりはつらいところだな。セルゲイ課長には休めと言われたけど……やっぱり、街を見回ったほうが、いい気がする」

「相変わらずね、ロイドは」

くすくす、とエリィが笑う。

我ながら生真面目すぎるとは思うが、これが性分だ。

「エリィはどうするんだ？　なにか予定が？」

「これから友人と街を見て巡るんだけど、よかったらロイドも一緒にどうかと思って」

「え？　お邪魔にならないかな？」

「むしろ、あちらが希望してるの。ロイドも知っている人よ。ロイドは私とふたりで散歩しても巡回みたいになっちゃうけど、他の人がいれば休暇になるでしょう？」

「なるほど、いいかもしれないな」

エリィとふたりで街を歩くのは魅力的だ。

べつに容姿だけが全てではないが、こんな綺麗な女性(ひと)と一緒にいると思うだけで、いまだに緊張することがある。

いつもの格好も似合っているが、今日は式典の参列ということもあって、街中でしか着られないような服装だった。

白いワンピースを腰のところでリボンで留め、ピンク色のジャケットを羽織っている。珍しく黒タイツではなく素足だった。
エリィと街を巡れたら、きっと楽しいだろう。
けれど、市民への配慮が足りてないと感じている今だと、彼女に指摘されたとおり、散歩というよりも巡回になりそうだった。
「このまま街を歩いて、どこかの店に入ったら、商品を見る前に〝何か困ったことはありませんか？〟と尋ねてしまいそうだよな」
「ふふ、ロイドらしいわね」
「エリィの言うとおり、他の人もいれば、ちゃんと休めるかもしれないな」
「無理にずっと一緒じゃなくてもいいから、お昼くらいは、どう？」
「気遣ってくれてありがとう。喜んで同席させてもらうよ」
それにしても、俺の知ってるエリィの友人って、誰だろう？
クロスベルの中心にある広場へとやってきた。
会議中のお祭りのような賑わいから一転、そこかしこで、自治州の将来について話し合う市民たちの姿が目立つ。
広場に出ている屋台のひとつに、エリィが向かう。
俺は後を追いかけた。

こちらを見つけ、ひとりのシスターが小さく手を振る。
「こんにちは、エリィさん」
「お待たせしました、リースさん」
待っていたのは、リース・アルジェントというシスターだった。
エリィが留学先のアルテリア法国で知り合った友人で、たしか俺たちの、ひとつ年上。十九か二十歳になると言っていた。
清楚な雰囲気のある落ち着いた女性だ。
「こんにちは。俺も同席してよかったんですか？」
「もちろんです。今回は私のほうからエリィさんに、誘ってもらえるよう、お願いしました。よろしくお願いします」
「こちらこそ……その、どういった理由で、俺のことを？」
「食事は大勢のほうが美味しいですから」
「なるほど」
まさか、本当にそんな理由ではないだろう。
何かしら〝後で真実を告げるから今は詮索しないで〟という意味だと受け取った。
なんせ彼女は、ただのシスターではない。
教会内でも特殊な組織――《星杯騎士団》の従騎士だ。
古代遺物（アーティファクト）の回収を目的としており、いくつもの特別な力を持っている。

この街（クロスベル）にも、調査のために訪れているらしい。
リースが、まるで空の女神（エイドス）の教えを説くような、静かで神々しい口調で言う。
「……ロイドさんはクロスベルの出身だとか」
「はい」
「地元の人しか知らないお店も、あるかと思いまして」
「え？　それは……食べ物の？」
「もちろんです」
「あの……ご期待に沿えるかわかりませんが……」
食べることが大好きな人だとは聞いていたが、予想以上に熱心だった。
まさか、本当に〝地元の店を知っていそう〟という理由で呼ばれたんだろうか？
エリィが肩を落とす。
「リースさんが、ロイドも連れて来て欲しい……と言うから、どうしてかと思ってたら……」
「明確な理由と的確な人選のはず」
ぼそっとリースが独りごちた。
ははは、と思わず笑い声をこぼしてしまう。
「まぁ、大丈夫だよ、エリィ。せっかく休暇をもらってるんだし、美味しいものを食べに行くのも悪くない」
「それもそうね」

エリィが微笑んだ。
リースが周りを見渡す。
「まず、このあたりで何か食べますか？」
広場には、いくつか屋台が出ていた。クレープやアイスクリームを売っている。
もう昼だし、てっきりレストランに行くのかと思っていたが、そういうのもいいだろう。
「リースさん、何か気になる屋台はありますか？」
「どれも悪くなかったです。なかなかの味でしたね」
過去形だった。
俺とエリィは首をかしげる。
「もう一通り、食べたことがあるんですか？」
「広場で待っていてほしいと言われたので……」
「ええ」
エリィがうなずいた。
リースが微笑みをこぼす。
「広場で屋台の物を、一通り食べて待っていました」
「えぇっ⁉　全部⁉」
「いえ、全部ではありません。クレープもアイスもポップコーンもカフェも、いくつも種類があるので、全メニューは無理でした……」
残念そうに言った。

どうやら、この広場にある屋台を一通り回った後らしい。
「あの、それじゃあ、お腹は、もういっぱいなんじゃ？」
「どうしてですか？」
冗談めかすこともなく本気でわからない、という顔をして尋ねられた。
こっちが聞きたい。どうしてお腹がいっぱいになってないんだろう？
さすがは、《星杯騎士団》の従騎士だ！
いや、あまり関係ないか。
「なんにしても、大丈夫そうなら、どこかお店に行きましょう。リクエストはありますか？」
「とてもお腹が空いているので、こってりしたものがいいですね」
けっこう食べたはずなのに……
聞いているだけで、こっちのお腹が膨れてしまいそうだった。
これは、生半可なところに連れて行ったら、がっかりされてしまうに違いない。
俺はしばらく考えて――
「よし、龍老飯店に行きましょう」
「どんなお店なんですか？」
「東方の料理を出す店です。あ、辛いものは平気ですか？」
「辛いものも大好きです」
俺たち三人は、東通りへと向かった。



龍老飯店に向かう途中、遊撃士協会の前を通る。
ちょうど、知り合いが扉を開けて出てきたところだった。
逞しい体つきの男性で、茶色い髪を束ね、ピンク色のシャツの胸元をはだけさせている。鍛え抜かれた筋肉が見えていた。
こちらを見つけて、ニッと笑みを浮かべる。
「あら、ロイド。ひさしぶりじゃない」
彼はれっきとした男なのだが、女性みたいなしゃべり方をした。
「こんにちは、ミシェルさん」
「いいところに来たわ。お願いしたいことがあるの」
「えっ？　遊撃士協会が、支援課に……ですか？」
もともと、遊撃士は街の便利屋のような側面を持っており、市民に厚く支持されている。それに倣って警察内に作られたのが、特務支援課だ。
くねっ、とミシェルが、しなを作った。
「そうなの。とっても困ってるのよ～」

エリィは慣れているのだが、リースが目をすがめた。
「クロスベルには、こういう人が多いんですか、エリィさん？」
「ど、どうかしら？　私は、よく知らないけど……」
「そう……さすがは、魔都クロスベル」
ミシェルが話を続ける。
「実は、さるお方にクロスベルを案内する仕事が入ってるのよ。もともとは、アリオスが引き受ける予定だったんだけど、急に別件が入っちゃったらしくて」
「そうなんですか」
「最近、とくに忙しい様子なのよね。何か聞いてないかしら？」
「俺もアリオスさんとは会ってないです」
「そう……」
「他のメンバーも手がいっぱいなんですか？」
「そうなのよ。リンとエオリアは気になることがあって調べてもらってるし、市民からの依頼もひっきりなしなのよね」
「なるほど。俺たちに手伝えることがあれば、いつでも言ってください」
「じゃあ、この件、お願いできるかしら？」
「詳しい話を教えてもらえますか？」
「ええ。ここじゃナンだから……」
ちょいちょい、とミシェルに手招きされ、俺たちは遊撃士協会の中に入る。
ドアを閉じると外の喧噪が遠くなった。それだけ中の会話も外に聞こえないというわけだ。
ミシェルが、リースのほうを見て首をかしげた。
「ところで、そちらのシスターは？」
「はじめまして。リース・アルジェントといいます」
「ああっ、あなたがそうなの。噂は聞いてるわ。愛想がよくて品があって博識なんですってね」
「そんな噂が？　ありがとうございます」
「他のことも聞いてるけど……ふぅん……〝アルジェント〟ね」
「はい」
品定めするようなミシェルの視線に、リースは静かな笑みを返す。
「まぁ、いいわ。ロイドたちのお友だちみたいだし」
エリィが首肯して請け合った。
改めて依頼について説明を受ける。
「依頼はクロスベルの観光案内よ。さるお方が政府の紹介した部分だけでなく、一般市民の暮らしも見たいと希望されてるの。アタシとしても先日の会議があんな幕切れになっちゃったでしょ？　このまま悪い印象を持って帰られたくないと思うのよね」
「もしかして、会議に参加されてた方なんですか⁉」
「フフ、そういうことになるわね。広場に、十四時までに行っ

てもらえるかしら？　人手がないからアタシが行くしかないと思ってたけど、お願いできるなら助かるわ」

　ミシェルは遊撃士協会の受付だ。事務所を空けてしまうと、いろいろと困ったことになるだろう。

「わかりました。引き受けます」

「ありがとう、恩に着るわ！　アタシから先方に伝えておくから、広場の鐘の前で待ってて」

「それで、先方の名前は？」

「フフ、会えばわかるわよ」

　ミシェルが、ギュッとウィンクした。

　遊撃士協会を出て、エリィとリースに相談する。

「俺はミシェルさんの依頼を受けるとして、エリィたちはどうする？」

「先方とリースさんがよければ、一緒に回ったらどうかしら？　クロスベルの観光という目的は同じなのだし、警察官の私たちだけより、教会のシスターの話も聞けたほうが、〝市民の暮らしが見たい〟という希望に叶うと思うの」

「私はかまいません」

「わかった。じゃあ、広場で会って、そこで訊いてみよう。約束の時間まで、もうあまりない」

「そうね。急ぎましょう」

「私は……早く美味しいものが食べられれば、なんでもいいです」

　実は、あまり考えずに話してるんじゃないか？

　一抹の不安を感じつつ、広場に戻るのだった。



　広場の鐘の前につく。

　まだ先方は来ていないようだ。貴人らしき相手の姿は見当たらなかった。

　ハッ！　とリースが顔色を変える。

「あれを見てください！」

「えっ、何かありましたか⁉」

　ただならぬ様子に、俺は警戒心を高めた。

　エリィもジャケットの下に手を伸ばす。そこには、彼女の得意武器である導力銃が収めてあった。

　リースが指さしたのは、ごく普通の屋台だ。

「スイーツの屋台です。さっきまでは、ありませんでした」

「あ、ああ……」

　そういうことか。

　俺は肩を落とした。

「そろそろ、オヤツの時間ですからね……特定の季節と時間

にだけ出てる屋台もあるんですよ」

　よく兄貴が買ってくれたっけな。懐かしい。

　ほ～、とエリィが吐息をつく。

「驚かさないでください、リースさん」

「あら、驚かせましたか？」

「あの……」

　すこし離れたところから、声をかけられた。

　振り向くと、ライム色の髪の凛々しい女性が立っている。黒色のスーツに身を包んでいるが、見間違えようもない。

「ユ……ッ⁉」

　思わず声をあげそうになり、なんとか呑みこんだ。

　エリィも同じく。

　要人の身辺警護をするＳＰの格好をした女性は、大陸全土で知らぬ者がいないほどの有名人だった。

　ユリア・シュバルツ准佐。リベール王室の親衛隊リーダーを任されている士官。その凛々しい姿や華麗な振る舞いから、他国にまでファンが多い。

「あ、あなたがいるということは……」

　その後ろに、視線を向ける。

　薄紫色の髪の少女が立っていた。

　ガウンを羽織り、膝まである紺色のスカートを履いている。その立ち姿に漂う気品と美貌は隠しようもないが、服装だけなら、いかにも市井の少女らしい格好だった。

　いつもは宝石で飾っている髪に、今日は花飾りをつけている。

　クローディア姫だった。

　リベール王国の姫で、次期女王として期待されている王太女。

「驚きました……」

　俺は思わずつぶやいていた。

　通商会議に出席していたＶＩＰとは聞いていたから、なんとか声をあげることは避けられたが。

　にっこりと彼女が笑みをこぼす。

「私も驚きました。遊撃士協会の方から〝とびきり腕がよくて、クロスベルの街なら何でも知っている人物に案内してもらうことになった〟とは聞いていましたが、ロイドさんやエリィさんだったなんて」

　過大な評価に、恐縮するばかりだ。

　ユリア准佐も口元を緩める。

「元々、市内を見たいと殿下がおっしゃられたとき、最初は君たちに話を持っていこうと思っていたのだ。しかし、特務支援課は警察組織……呼び寄せての面会くらいならまだしも、市内観光など頼んだら警備だ交通整理だと大事になってしまうのではないかと危惧してね」

「たしかに、支援要請は警察本部でも確認していますから、とんでもない騒ぎになっていたと思います」

「そこで、遊撃士協会に頼んだのだが……よく気を回してくれたと言うべきか。それとも、これも運命の巡り合わせなのかな？」

「偶然だと思いますけど……ミシェルさんは、この街で長く遊撃士協会の切り盛りをしてる方ですから。もしかしたら、何か意図があったのかもしれません」

そう思えるほど、これは意外な再会だった。

あ、とエリィがリースを紹介する。

「こちら、クロスベル大聖堂のシスターで――」

「えっ⁉」

声をあげたのは、クローディア姫だった。ユリア准佐も意外そうな顔を見せる。

リースが丁寧にお辞儀した。

「おひさしぶりです、クローディア姫」

「あら、お知り合いでしたか？」

エリィの問いに、リースたち三人がうなずく。

「はい」

クローディア姫が笑みをこぼす。

「今日は喜ばしい再会の多い日です。それにしても、リースさん、たしか、ケビンさんと一緒のはずでは？　お元気かしら？」

「ケビンは元気ですが、この街に来ていません。本来ならば、様々な調査のため彼自身がクロスベル入りをするのが筋ではあったのですが……大司教の目があったので、代わりに私が情報収集役として派遣されています」

「なるほど。そういう事情があるのですね」

「もうロイドさんたちには話してありますが、街中では、私の素性は内緒でお願いします」

「心得ました。ちょっとドキドキしますね」

「はい」

普通のシスターの振りをする星杯騎士に、市井の少女の振りをするリベール王国のお姫様か。

俺は胃の痛くなる思いがした。

グギュギュ～、と地響きのような音があがる。

「ん？　なんだ？」

「あ……」

リースが困ったような顔をしているのに気付いた。

「どうかしましたか？」

「……私のお腹が悲鳴をあげている」

「そ、そうですか」

今のは、そういうことか。

くすくす、とクローディア姫やエリィが苦笑した。微笑ましい。

ユリア准佐が、改めて依頼を確認する。

「話は聞いてると思うが、君たちにクロスベルの街を案内してもらいたい。観光地などではなく、市民の日々の生活が知りたい、と殿下はご所望だ」

「わかりました……それでは、気取らないお店で食事などいかがでしょうか？　もう昼は済ませてらっしゃるかもしれませんが」

「フフ……そうだな。空腹の方もいらっしゃるようだし……ん？」

ふらふらと歩きだしたリースを、エリィとクローディア姫が追いかける。

「あ、あの、リースさん⁉」

「どこ行くんです？」

スイーツの屋台の前だった。

「パフェのバスケットサイズをひとつ。大盛りで」

かしこまりました～♪　と屋台のお姉さんが、バケツみたいな器に、どばどばとアイスを詰め、フルーツを乗せていく。

受け取ったリースは、目が据わっていた。

「フレークでの底上げなしのバケツサイズ……ボリュームは文句なし。味のほうは……むっ。甘すぎず、それでいて濃厚。フルーツも新鮮。さすがクロスベルのスイーツ。いい仕事してる」

ぶつぶつと独り言のように並べ立てる。

エリィがため息をついた。

「はぁ、リースさんてば……」

「私も頂こうかしら」

クローディア姫が、そんなことを言い出した。

「えっ？　屋台でお求めになるんですか？　歩きながら食べることになりますけど……？」

おそるおそる、といったふうにエリィが尋ねる。

はい、とクローディア姫はうれしそうにうなずいた。

「そういう経験、普段はできませんし。それに、とっても美味しそうなので」

「わかりました……じゃあ、私も一緒に」

なんだかんだ言って、女の子がスイーツを前にしたら買う方向で話がまとまるものらしい。

俺はユリア准佐にも水を向けてみる。

「買わなくていいんですか？」

「いや、私は遠慮しよう」

「やっぱり、SPとして、気は抜けませんか」

「フフ……実は、甘いものが得意ではないのでね」

「なるほど」

そんなところもクールな人だった。



エリィとクローディア姫が、ワンカップのパフェを購入する。

すかさず、リースが近寄ってきた。

「味見、味見させてください」

「あ、はい」

エリィがスプーンにすくって、差し出す。

はむ、とくわえて。

「むむ……ストロベリーのアイスも、なかなか」

真剣な表情をしていた。

クローディア姫が口元を抑えて笑う。

「ふふっ、リースさん、本当に食べることが好きなんですね。私のも食べてみますか?」

「ありがとうございます。大好きです」

「なんだか、照れちゃいますね」

クローディア姫がスプーンを差し出すと、リースが遠慮なく味見した。

「うん、マンゴー味もなかなか……ちょっと甘いけど、小さいカップならちょうどいい。ナイスな選択」

「…………」

まじまじとユリア准佐が見つめている。

その視線に気付いたか、クローディア姫がやってきた。

「はい、ユリアさんも」

「えっ?」

クローディア姫がスプーンを差し出してくる。

ピンク色のスプーンに乗った、黄色いアイスクリーム。

「あ、でも甘いのは苦手だったかしら?」

「いえ、ひと口くらいなら、うれしいです」

「ほんと、よかった」

クローディア姫の差し出したスプーンに、何秒か置いて、ユリア准佐が口をつけた。

「……はむ」

うれしそうに微笑んでいるお姫様に、准佐が優しげな笑みを返す。

ふたりの表情を見て——彼女たちは仲がいいだけでなく固い信頼関係で結ばれているのだな、と俺は感じるのだった。

それから、リースの提案により、俺たちは龍老飯店に向かった。

龍老飯店での食事は、なかなか好評だった。

そのあと、今度は東通りの屋台を見てまわることになった。

クローディア姫が瞳を輝かせる。

「すごいですね。活気があって」

俺も街に詳しいわけではないが、できるだけ丁寧に説明していく。
「野菜や魚は、ここらが安くて新鮮です。珍しい香辛料などは百貨店で買ったりして、市民は使い分けてますね」
「なるほど」
俺の説明に、ひとつひとつクローディア姫がうなずく。
その後ろにエリィとユリア准佐が付き従い。
最後尾をリースが――
もぐもぐしながらついてくる。いつの間にか饅頭を買っていた。
「あの……リースさん、さっきの東方料理の店では足りませんでしたか？」
「いえ、充分に満足したんですが……」
「ソレは、いったい……？」
「お饅頭が美味しそうだったので」
「な、なるほど」
到底、真似できそうになかった。むしろ理解できない。
「食べたいですか？」
「お気持ちだけいただいておきます」
「そうですか。ところで、このへんにカフェはありませんか？」
「どうしました？」
「飲み物が欲しいです」
俺はエリィと顔を見合わせる。
「いいのかな、このままだと、クロスベル観光というより、クロスベルのグルメ観光になっちゃいそうだけど」
「うーん、予想外だったわ。美味しい店に行く予定ではあったけど、ずっと美味しい店を巡ることになるとは思ってなかったから」
くすくす、とクローディア姫が微笑する。
「かまいませんよ。できれば、みなさんがいつも使っているカフェを教えてください」
行く先にユリア准佐は意見がないらしく、むしろ周囲を警戒している様子だった。
この近くで、カフェというと――
すぐに思い至った。
「いい店があるんです。支援課ビルの近くのカフェに案内します。焼きたてパンが自慢のオープンカフェなんですよ」
「まあ、素敵ですね」
俺たちは、西通りのベーカリーカフェ《モルジュ》に足を運んだ。
煉瓦の建物からはパンを焼く香りがただよっている。店の前は、パラソルテーブルのならぶオープンカフェになっていた。

クローディア姫が、手を合わせる。
「まあ、かわいらしいです」
納得顔でリースがうなずいた。
「クロスベルでカフェといえば《モルジュ》……いい選択してる」
「リースさんも、よく来るんですか？」
「もちろんです。けれど、いつもはパンを買って帰るだけなので、カフェでゆっくりするのは初めてです。楽しみです」
リースが一足早く店へと入っていく。
このカフェであれば、〝市民の日々の生活が知りたい〟という希望に添うのではないだろうか。
店構えを見ていたクローディア姫が、ふと立ち止まった。
「あ、このお店は……」
「何か気になることがありましたか？」
「たしか、クロスベル新聞（タイムズ）に記事が載ってました」
「ああ、以前、紹介されたことがあったとか」
「市民の憩いのお店だそうですね。うれしいです。こういう場所を訪ねてみたかったんです」
「それはよかった。オスカーが聞いたら喜びますよ」
「オスカーさん？」
「あ、俺の幼馴染みが、ここで働いてるんです。店主のモルジュさんの一番弟子として。それに、モルジュさんの娘のベネットも同じくらいがんばってます」
「仲のいいライバル、といった感じかしら？」
「そうですね」
「ふふっ、楽しそうです」
結果的に、リースのおかげで、いい案内になったようだ。
そのリースが、あわてて店から飛び出してきた。
いつもの余裕のある表情ではない。
「ロイドさん！　大変です！」
「えっ!?」
「早く来てください！」
「あ、はい！」
俺は急いで店のなかに入る。
エリィとクローディア姫とユリア准佐もついてきた。
こっちこっち、とカウンターの奥からリースが手招きする。
奥の扉の先は、たしか、パン作りの厨房になっているはず。入ってしまっていいのかな？　と思いつつ店内を見渡すが、誰もいない。
買い物客の少ない時間帯なので、来客がないのはともかく、店主のモルジュもオスカーもベネットの姿もない。
カウンターに誰もいないというのは初めてのことだ。
嫌な予感がする。
俺は奥の厨房へと急いだ。

　そこに、モルジュが倒れていた。
　彼を囲んで、オスカーとベネットがしゃがみこんでいる。
　少し離れてリースも。
　俺は駆け寄った。
「モルジュさん!? どうしたんですか!?」
「う、う～ん……俺は、もう……ダメだぁ～……」
　うめくモルジュを心配そうに見て、オスカーが声をかける。
「バカ言わないでくださいよ、腰を痛めただけじゃないですか！」
「父さん、しっかりして！」
「ベネット……あとは……頼んだぜ……」
「そんな！」
「そのパン生地、ちゃんと焼いて店にならべといてくれよ」
「う、うん。それは、やるけど」
「あと、やわらかい小麦粉が少なくなってるから、ちゃんと注文を……」
「それが大切なのはわかるけど、そんな場合じゃないでしょ!? 父さんってば!!」
　俺は立ち尽くしていた。
「なあ、オスカー……モルジュさんは、腰を？」
「そうなんだ。重たい物は俺が運ぶって言ってんのに、小麦粉の袋を二つも持つからよ」
「どうするんだ？」
「とりあえず、俺がウルスラ病院まで連れてく。ベネット……店は頼むぜ？」
「う、うん！」
　黒髪を留めるヘアバンドを付け直し、ベネットがうなずいた。
　俺は前に進み出る。
「オスカー、それなら、俺たちが病院に……」
「いや。ありがたいけど、親方は俺の師匠であり、親父みたいな人だ。これは俺の役目だと思うんだよ」
「そうか……わかった」
「ロイド、よかったら、ベネットを助けてやってくれ」
「だ、大丈夫よ！ 私ひとりだって平気！ 早く行きなさいよね」
「おう。病院に着いたら連絡するぜ――さあ、親方、かつぐからな？」
「う～ん……オスカー……すまんな～」
「なに言ってんだ、ウルスラ病院に行けば、すぐ治してくれるさ。よいせっ」
「うう～ん」
　オスカーはモルジュを背負うと、病院に向かった。



　残されたベネットが青ざめた顔をしている。
「どうしよう……」
「ベネット、ひとりで大丈夫なのか？」
「あ、はい。何にしましょう？」
　俺の問いかけに、そんな言葉を返してきた。ちょっと混乱しているようだ。
「いや、まぁ、客として来たんだけど……」
　スンスンとリースが鼻を鳴らす。
「パンの焼ける匂いが強くなってきましたね」
「あっ！」
　ベネットが叫んで、あわてて釜を開けた。
　素早く中からロールパンを取り出す。
「あぶなかった～」
「素晴らしい香りですね。これは、いい焼きたてパンです」
「あ、ありがとうございます」
　リースが絶賛して、ベネットが頬を赤らめた。
　エリィが尋ねる。
「この時間から、まだパンを作るんでしょう？ カフェやレジはどうするの？」
「うっ……それは……ひとりで三人分やるしか……」
「臨時休業が現実的な手段ではないか？」
　ユリア准佐が提案した。
　その通りだろう、と俺も思う。
「それでは、この焼きたてのパンたちがかわいそうです」
　リースが残念そうにつぶやいた。
　エリィも目を伏せる。
　クローディア姫が進み出た。
「あの……よかったら、私にお手伝いさせてもらえませんか？」
「えっ!?」
　驚いたのは、ベネットばかりではない。その場にいた全員だった。
「素人がお手伝いなんて、かえってお邪魔かもしれませんけど……私、このオープンカフェに来るのが憧れでした。お店が休みになったら、すごく残念です。他のお客さんたちも、同じじゃないかしら？」
　俺はうなずく。
「たしかに、まだ観光客は残っているし、外国からのお客さんも来るだろうな……ベネット、俺にも何かできることがあれば手伝わせてもらうよ」
　エリィも賛同してくれた。

「そうよね。地元の人たちも、このお店のパンを楽しみにしてるはずだもの。私たちに手伝えることないかしら、ベネットさん」

ベネットがうつむく。

「……オスカーも、父さんの前だから、任せるって言ったけど、臨時休業でも仕方ないって考えてると思う」

やっぱり難しいか、と諦めかけた。

しかし、ベネットが、クワッと顔をあげる。

「だからこそ！　なにがなんでも店は閉じたくないんです。私、オスカーを驚かせたいし、父さんやお客さんをガッカリさせたくない――みなさん、力を貸してください！お願いします!!」

これ以上ない、というくらい頭を下げられた。

「もちろん」

俺はうなずいて、エリィも同じだった。

クローディア姫が、ユリア准佐の手を取る。

「ユリアさん、私のわがまま、聞いてくれますか？」

一国の王太女が、パン屋の手伝いである。普通なら猛反対してもおかしくない。

ユリア准佐が考えこむ。

やがて、キリッと結んだ唇を開いた。

「私が殿下のなさることに反対するはずがありません」

頭を垂れた。

クローディア姫が安堵した笑みを浮かべる。

「ありがとう、ユリアさん！」

「いえ、私は殿下がご無事であれば」

「ふふ……それでは、ベネットさん――私とユリアさんは、何をすればいいですか？」

私も手伝うんですか!?　という顔をユリア准佐が浮かべた。

しかし、抗議はせずに指示を待つ。

なんというか、さすがだった。

リースが片手を挙げる。

「パンの作り方なら、一通り習得しています。厨房で手伝えることがあるでしょう」

こちらも、さすがだった。

ベネットが思案する。

「それじゃあ、ロイドさんは小麦を運んだりといった力仕事をお願いします」

「わかった」

「シスターさんは、私のアシスタントということで厨房を」

「はい」

「エリィさんにレジをお任せして」

「わかったわ」

「おふたりにカフェのウェートレスをお願いしたいのですけど、どうでしょうか？」

ベネットの提案に、クローディア姫がうなずいた。

「はい。がんばります」

「……客の前に出るのは……いや、厨房よりは安全か。了解した」

ユリア准佐もうなずく。

全員が引き受けたところで、改めてベネットが頭を下げる。

「ありがとうございます。あっ、私ったら、まだお名前をうかがってませんでした」

クローディア姫が固まる。

ユリア准佐が視線を逸らした。

まずリースが率先して。

「何度かお店には来ていましたが、名乗るのは初めてですね……先日、クロスベル大聖堂に赴任しましたリース・アルジェントといいます。よろしくお願いします」

「あ、はい。ベネットです。いつもありがとうございます！今日は、よろしくお願いします！」

そのやり取りの間に落ち着きを取り戻したクローディア姫が。

「リベールから観光に来ています、クローゼといいます。こちらは、ユリアさん。私たち、学生で親友同士なんです」

「が、学生……？」

ぼそり、とユリア准佐がつぶやいた。

「なるほど……」

ベネットがいぶかしむ。

「……う〜ん、どこかで見たことがあるような？」

俺は冷や汗を垂らした。

どこかで見たことがある？　それは、新聞の記事じゃないかな？

俺はベネットをうながして。

「早く準備をしよう、慣れてない仕事だから、いろいろ教えてもらわないと」

「そうね。あ、替えのエプロンを出すから。みんな、それを付けて」



ベネットの指示に従い、小麦粉を持ってきたり、水を汲んできたり。

「うん、バターロールパン、焼き上がり！　ロイドさん、持っていってもらえますか？」

「わかった」

トレーに積んで、厨房を出る。

早くもレジには客が並んでいた。

エリィがこちらに気付いて、声をかけてくる。

「おつかれさま、ロイド。ちょっとお願いできるかしら？」

「ああ」

レジにエリィと並んで入って、パンを紙袋に入れる手伝いをする。

ニコニコした老婦人が。

「おや、珍しいわね。ロイドさんにエリィさんじゃないの」

「ちょっと事情がありまして、今日は俺たちが手伝いに入ってるんです」

「そうなの、大変ねえ」

「いえ……お待たせしました」

パンを入れた紙袋を渡す。

また次のお客さんのパンを紙袋へ。

これだけ大勢の人たちに無駄足を運ばせることにならなくてよかった。

そうしていると、エプロンドレス姿のクローディア姫が、レジにやってきた。

「あの！」

「ん？」

「注文を受けたんです！」

瞳を輝かせて、頬を上気させていた。

当然、オープンカフェでウェートレスをしているのだから注文は受けるだろう、と言うのは無粋だ。

なんせ、彼女は生まれて初めて注文を受けたのだから。

「わかりました。何を出せばいいですか？」

「カフェオレ、砂糖を多目です。それと、オレンジジュース。あと、オススメの焼きたてパン」

「やり方は聞いてありますから、やってみます」

「ええ、お願いします」

クローディア姫が客席に出ていく。

キャ～～!?　と黄色い歓声があがった。

ユリア准佐が注文を取りに行ったところ、女性客が騒ぎだしたらしい。

まさか、もうユリア准佐だとバレてしまったか!?

女性客のひとりが尋ねる。

「あの！　あの！　リベール王国のユリア・シュバルツ准佐に〝似てる〟って言われませんか!?」

「ッ!?　そ、そうですか……どうでしょうか？　あまり似てないと思いますけど……」

「え～っ、似てますよ～!!」

「……困ったな」

あのユリア准佐がたじろいでいた。

髪型など変えて変装しなくていいのか尋ねたとき――クローディア姫ならともかく、異国で自分のことを気に掛ける者などいるまい、と笑っていたが。

すっかり囲まれていた。

黒服のユリア准佐は、主に女性客に大好評だ。

お客さんたちは、まさか本物だとは夢にも思っていない様子だった。

クローディア姫のほうも、男性のお客さんたちから。

「似てるって言われない？」

と訊かれていたが……

「よく言われます。でも王太女がカフェで店員をしてたら、びっくりですよね」

そう笑って返していた。

たしかに、改めて見ると、びっくりだ。

レジに並んでいる客がいなくなったので、俺は厨房へと戻った。

「こんな感じですか？」

「そうそう」

リースが、ベネットからパン作りを教わっていた。

「あれ？　パンを作るのは任せられないんじゃ？」

「試しに形を作るのをやってもらったら、リースさん、すごく上手いのよ」

「簡単なものしか無理ですが……」

「それでも、充分に助かるわ」

「順調そうだな。よし、俺は、他に何したらいい？」

「あ、倉庫からミルクを運んできてもらえますか」

「わかった」

しばらく厨房でパン作りの手伝いをしていた。

ふと外が騒がしいことに気付く。

ベネットが首をかしげた。

「なにかあったかしら？」

「見てこよう。ちょうどパンも焼けたしな」

俺は厨房の扉を開いた。

明らかに人の声が多くなっている。

なんとカフェに座りきれないほどの客が来ていた。

「どういうことだ……!?」

「あっ、ロイド！　カフェのほうを手伝ってちょうだい！」

エリィの声から余裕が消えている。

レジを待っているお客さんの人数も、明らかに増えていた。

オープンカフェへ視線を向ける。

三つのテーブルの六人から、ユリア准佐に次々と注文の声が飛んだ。

「私は、カフェオレ」

「えっと、アタシは、カフェモカで」
「あの～あの～オレンジジュースとドーナッツ。あ、やっぱり、ホットコーヒーとフレッシュサンドで」
「こっち、ベルベリージュースね。あと、ベーコンレタスサンドのレタス抜き」
「ミルクロールと……クロワッサンにしようかな～。ドーナッツがいいな。うん。それでお願いします」
　ユリア准佐がうなずく。
「そちらから――カフェオレ、カフェモカ、ホットコーヒーとフレッシュサンド。ベルベリージュースとベーコンレタスサンドのレタス抜き、ミルクロールとドーナッツですね。少々、お待ちください」
　おお～、と歓声さえあがった。
　さすがはユリア准佐だ。
　クローディア姫がレジに戻ってくる。
「ふぅ、ウェートレスって大変なんですね。行ったり来たりが……」
「そうみたいですね」
「どうしてかしら？　男性のお客さんって何人かで来ても、一度に注文しないで、ひとりずつ頼むことがあるんですね。とくに二杯目のとき」
「ああ、なるほど……」
　それは、おそらく、クローディア姫に（よく似たウェートレスだと思っているはずだが）何度もテーブルに来て欲しいからだろう。
「お疲れじゃありませんか？」
「いいえ、なんだかダンスか剣術の稽古みたいで楽しいです。最近、飛行船に乗っているか、ホテル暮らしばかりでしたからね。呼ばれたら、あちらへこちらへ、行ったり来たり」
　本当にうれしそうに話す。
　俺はうなずいて聞いていた。
　また呼ばれて、クローディア姫が小走りに出ていく。
「はい、ただいま！」
　陽が西に傾きかけた頃、オスカーから連絡が入る。
　ちょうど、俺が倉庫から小麦粉を持ってきて、リースが水を汲んできたときだった。
　ベネットが厨房に持ってきておいた導力通信機に飛びつく。
　小麦粉で真っ白になった手のまま。
「はい！」
『俺だ。そっちはどうしてる？』
　オスカーの声が漏れてきた。
　あちらに見えているわけではないけど、ベネットが胸を

張った。
「ちゃ～んと店は開けてるし、新記録ってくらい繁盛してるわよ！」
『えっ、開けてるのか⁉』
　オスカーの驚いた声に、ベネットがうれしそうな顔をした。
「当然よ」
『ロイドたちに手伝ってもらってるのか？』
「うっ……まぁ、そうだけど……」
『そうか。ちゃんとお礼、するんだぞ』
「言われなくてもわかってるわよ！　子ども扱いしないで」
『ああ』
「……それで、父さんは？」
『それがなぁ……』
「…………」
『なんか、東方から来てる先生がいて、ひっぱったり、もんだりしてもらったら、ほとんど痛みが引いたらしいんだ』
「えっ⁉　ホント⁉」
『しばらくは休養が必要らしいけどな。今日にでも導力バスで帰れそうだよ』
　ベネットが涙ぐんで目元をぬぐう。
　顔が小麦粉で白くなった。
「よかった……ホント……よかったよ～」
『ああ、まったくだ。しばらくは、俺とふたりになるけど、まぁ、がんばろうぜ』
「うん」
『じゃあ、これから帰る』
「……まってる」
　ベネットが涙声で、うなずいた。
　俺はリースと顔を見合わせて、互いに笑みを浮かべるのだった。
　オスカーとモルジュが戻ってきたのは、七時近く。
　一番、店が混雑している時間だった。
　そんな最中にウェートレスやレジ打ちが抜けるわけにはいかない。
　結局、お店が閉まる八時まで、お手伝いを続けた。
　クローディア姫とユリア准佐（によく似たウェートレス）のおかげで、いつにも増して来客が多かったのも一因だったが。
　閉店後――
　モルジュをベッドに寝かせたあと。
　オスカーとベネットが深々と頭をさげる。
「ありがとうな、ロイド！　本当に助かった！」

「ありがとうございました!!」
「いや、今回は俺じゃなくて、クロ……クローゼさんに、お礼を言ってくれ。言い出したのは彼女だから」
　クローディア姫が手を左右に振る。
「そんな！　私なんて素人ですからお役に立てたかどうか。それより、こんな貴重な体験をさせてもらって、本当に感謝しています。どうか、面（おもて）を上げてください」
　おもて？
　ユリア准佐が、コホンと咳払いする。
「少々、時間が遅くなりました。もう帰りませんと」
「そうですね。名残惜しいけど……」
「あの……これ、たいした額じゃないんですけど……」
　ベネットがアルバイト代を払おうとしたが、クローディア姫が首を横に振る。
「本当に、私のほうがお礼したいくらいなんです。だから、そういうのは、お気持ちだけで大丈夫ですから」
　リースも辞退する。
「シスターがアルバイトするのは問題がありますので」
「俺たちも警察官だからな」
　実績に応じて報酬は支払われるが、それは警察本部からであって、助けた市民からではない。
　戸惑ったようにベネットがオスカーを見る。
　うーん、と彼は考えてから。
「気持ちか……それじゃあ、これは受け取ってもらえないか？　売れ残りで申し訳ないんだが」
　紙袋いっぱいにパンを入れる。
　これには、クローディア姫も笑みを浮かべた。
「うれしいご褒美です。ありがとうございます」
　リースもご満悦。
「うん……もしゃもしゃ……美味しいです。ありがとうございます」
　早くも食べていた。
　みんなの頭に汗マークが浮かぶ。
　苦笑しつつ、俺もありがたくオスカーからパンを受け取った。
「支援課のみんなと分けさせてもらうよ」
　エリィもうなずく。
　別れ際はオスカーが笑顔で片手を振り、ベネットが何度も頭を下げた。



　翌日――
　リベール王国のクローディア・フォン・アウスレーゼ王太女を見送る式典が催された。
　例によって、俺はエリィと式典に呼ばれている。
　クロスベル空港の式典用のスペースに、ずらりと並んだ参列者たち。その末席に、俺たちは立っていた。
　高速巡洋艦《アルセイユ》へ乗りこむ前のクローディア姫を記者たちが囲んでいた。
　無数のフラッシュが浴びせられている。
　彼女と昨日、街を歩き回ったなんて、自分の記憶が嘘みたいだ。
　大勢の記者のなかで、うまいこと陣取って質問を投げたのはクロスベル新聞（タイムズ）のグレイス記者だった。
「殿下、クロスベルの街をご覧になりましたか？」
「はい。とても活気があり、困難に立ち向かう力がある……若々しい街だと思いました」
「そのなかで、一番印象深かったのは？」
「どこも大変素晴らしく……」
　そこまで言ってから、ふとクローディア姫が参列者に視線を巡らせた。
　目が合った、ような気がした。
　気のせいかもしれない。
　しかし、彼女が微笑んだのは間違いない。
　ユリア准佐まで、そっと口元を緩める。
　クローディア姫がやわらかい笑みをうかべ、それから唇を開く。
「パン屋さん……そう、クロスベルの街のパン屋さんが印象的でした」

第8話　『クロスベルの休日』　了


★『英雄伝説　零の軌跡』読みきりコミックが登場！
ミシュラムNO.1 ホスト決定戦！
甘酒
あまざけ
わぁー綺麗！
そこらじゃ手に入らない品だよなあ…
ミシュラムでホストをしてる時にお客さんにもらったんだ
きれい…
さすがワジだな
ミシュラムに行けるってだけですごいのに
オレもご婦人にこんなのプレゼントされてーー！
まったくランディは…
わいわい
ヘッ！たかがブレスレットが何だ！




女に貢がせるだけだろ？
ンなモンの一つや二つちょろいぜ
ギロリ…
ヴァルド…いたの？
誰にでもできる事じゃないと思うけど…
ぐぬううう…
ヴァルドさんがエスコートしてる姿はちょっと考えつかないです
ぬーん
ぶはッ
何笑ってんだそこ!!
ホストは気配りとコミュニケーションが大切なんだ
オレ様を引き合いに出してよくヌケヌケとッ…
勝手に入ってきたのアンタだろーが
ヴァルドが女性をエスコートするなんて無理に決まってるじゃないか
てめえにできてオレ様にできない事なんざある訳ねえ!!
どっちがうまくやれるか勝負だ!!
ニコリ
受けて立つよ


ブティック・コルセリカ
二人ともどんな服を選んでるのかしらね
ヴァルドがちょっと心配だけど…
のっし
おう 待たせたな!
何そのセンス!?
カリスマ
男に必須のワイルド・パワー・カリスマを取り入れたぜ
ワイルド
パワー
サーカスにでも行くつもり!?
ド
カツ…
みんなお待たせ


どうかな?
今日はフォーマルに決めてみたよ
チッ
フン…
五分五分って所か…
すごい自信だな!?
これでどうかしら
落ち着かねーぜ…


今日のお客さん達だよ
オレに任せとけ
よろしくなァ!!
おどろかせてごめんね
僕の方もよろしく
チュ…
あいさつが漢らしすぎる!!
……
見守るサーベルバイパー
兄貴がんばって
〜〜っ…

レストラン・フォルトゥナ
あっち大丈夫かな
もう勝負なんておいといて飯食おーぜ
じゃあ乾杯しようか
そうね
ぎくり
ヴァルドすっごい落ち着きない!!
大丈夫なの!?
お おう
そうかまずは乾杯からか…


ドグワシャーッ
乾杯!!
ちょ!?
なんだこのコップめちゃくちゃモロいぞ…!?
女の人達が怯えてるのに気付いて!
ゾーーーッ
その後もヴァルドのエスコート暴走は続いた…
ガツガツ
なんだこれつめてえ!!
ザザーン…


ムゥ…
段差があるから気をつけてね
いちいちいけすかないヤローだ…
オレ様だって!!
ブルブル
ふん!!
きゃ!?


兄貴すごい!!
かっこいい
男ならこれくらい当然だ!!
やるじゃない
ただの階段でそこまでしなくても…
兄貴がかっこいいとすかさず現われるサーベルバイパー
夜空…
きれいだろ?
すごい…良い雰囲気だ!
もう少しダイエットしたらどうだ?
意外と重いぞアンタ
ごごめんなさい…
なんかイヤな空気で終わった…


今日はありがとう
また会えたら嬉しいな
またね
どうだこの勝負オレ様の勝ちだろ!
ああ!?
それはどうかなあ
ニコニコ
ああ!?
どう見てもワジの方が上だったと思うけど…


初めてにしては がんばったと 思うけど…
もう我慢 ならねえ！
あれで パーフェクトだって 言うなら まだまだだね
やれやれ 結局 そうなるの？
なんだと ……!?
てめえとはこんな まどろっこしい 勝負してねえで 決闘でカタつけんのが 一番だ!!
まあそっちが その気なら 受けて立つよ
カチン

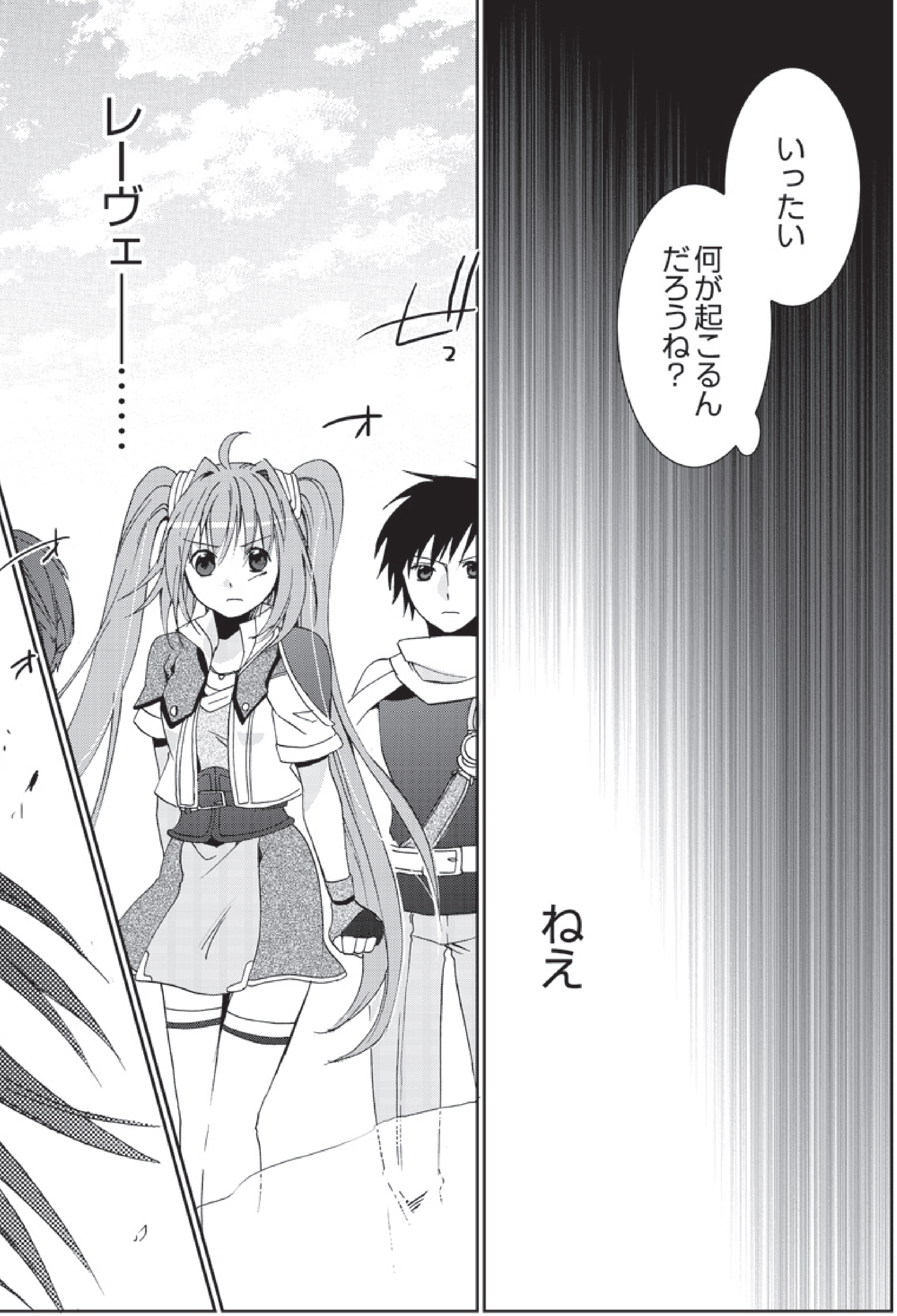

ちょ ちょっと 二人共——!!
オ
オオオッ… うらァ!!
危ない 危ない
そんな力任せじゃ 女の子も 怖がっちゃうよ
シュウゥ…


はアアアッ
ガガッ
ッ…とォ
はッ
いい動きしやがるじゃねェか！
いくぜワジ!!
かかってきなよ
ガキイイイ
イイン…
ぽろっ…
全く…二人共せっかくの一張羅が台無しだわ
チッ
男の勝負に水差しやがって…
あのな～っ
俺達が総出で止めてなかったら街がめちゃくちゃになってたっつの
ぐしゃ～


ふふ
今日は楽しかったよ
ヴァルドみたいなタイプのホストがいても面白いかもしれないね
気が向いたらまたやってみたら？
クス
ハッ…
てめえが役立たずで引退するって時は引き継いでやってもいいぜ？
あの二人って…
ホストでコンビ組んだら意外とウケたりして
そんな迷惑コンビごめんです…
おわり


空の軌跡 外伝
レーヴェ物語
第十七話
脚本 田沢大典
作画 楽時たらひ
報告ご苦労様です
カンパネルラ
そう…
殲滅天使まで…
はい
浮遊都市の中枢
アクシスピラー
各階で待機していた執行者のいずれも
その勢いを止めることは叶わなかったようです
遊撃士一行はまもなく最上階に到着することでしょう
……


残るは《剣帝》のみ
……ですね?
…はい
…そうですか…
…ついに…この時が
来てしまったのですね…
……
「ついにこの時が」……


いったい
何が起こるんだろうね?
ねえ
レーヴェ――……


意外に早かったな
もう少し待たされるかと思っていたぞ
あたし達も成長してるってことよ
しかしヨシュアは違うようだな？
ヘッ…
色んな人の思いを背負って…ここまで来たんだからっ！
…そうか


…エステル
それにみんな
ここは僕に任せてくれないか
!?
僕は《剣帝》に
いや
レーヴェに
伝えなきゃならない答えがあるんだ
だから僕一人で戦わなきゃいけない
いいかな
……
ありがとう


答えを見つけたようだなヨシュア
うん
レーヴェの言う通りだった
僕はただ逃げていた
姉さんの死からも
教授に従わないという選択肢からも
全部…自分の弱さだったというのにね
ザッ
……でも


今は違う
遊撃士としての心得と《漆黒の牙》としての技
その全てをもって《剣帝》に挑ませてもらう!
ーいいだろう


来い
《漆黒の牙》
きゃ
……
なッ…


何て
速さッ…
…レーヴェ
聞きたいことがあるんだ
レーヴェは自分の意志で教授に協力してると言ってた…
その目的はなんだったの？
…姉さんの
復讐…？
……
復讐してもカリンが戻ってくる訳ではない


俺はこの世に問いかけることにしたんだ
人という存在に
時代
国家
世論
そういった大きなものに翻弄される者達に
真実を容易く隠蔽し信じたい現実のみを受け入れる
それが人の弱さだ
それが
“欺瞞”だ！


欺瞞を抱える限り人は必ず同じことを繰り返す
カリンのような犠牲が生まれる
俺はそれを防ぐために自ら《身喰らう蛇》に身を投じた
――それこそ欺瞞じゃないか…



…何？
レーヴェの言う通り人は弱い…
僕もそうだ
ッ…だけど大きなものの前でも翻弄されなかった人はいる！
10年前のあの日の姉さんのように!!
レーヴェが…あんなにも姉さんを大切に想っていたレーヴェが
そのことに気がついてないわけがないんだッ!!



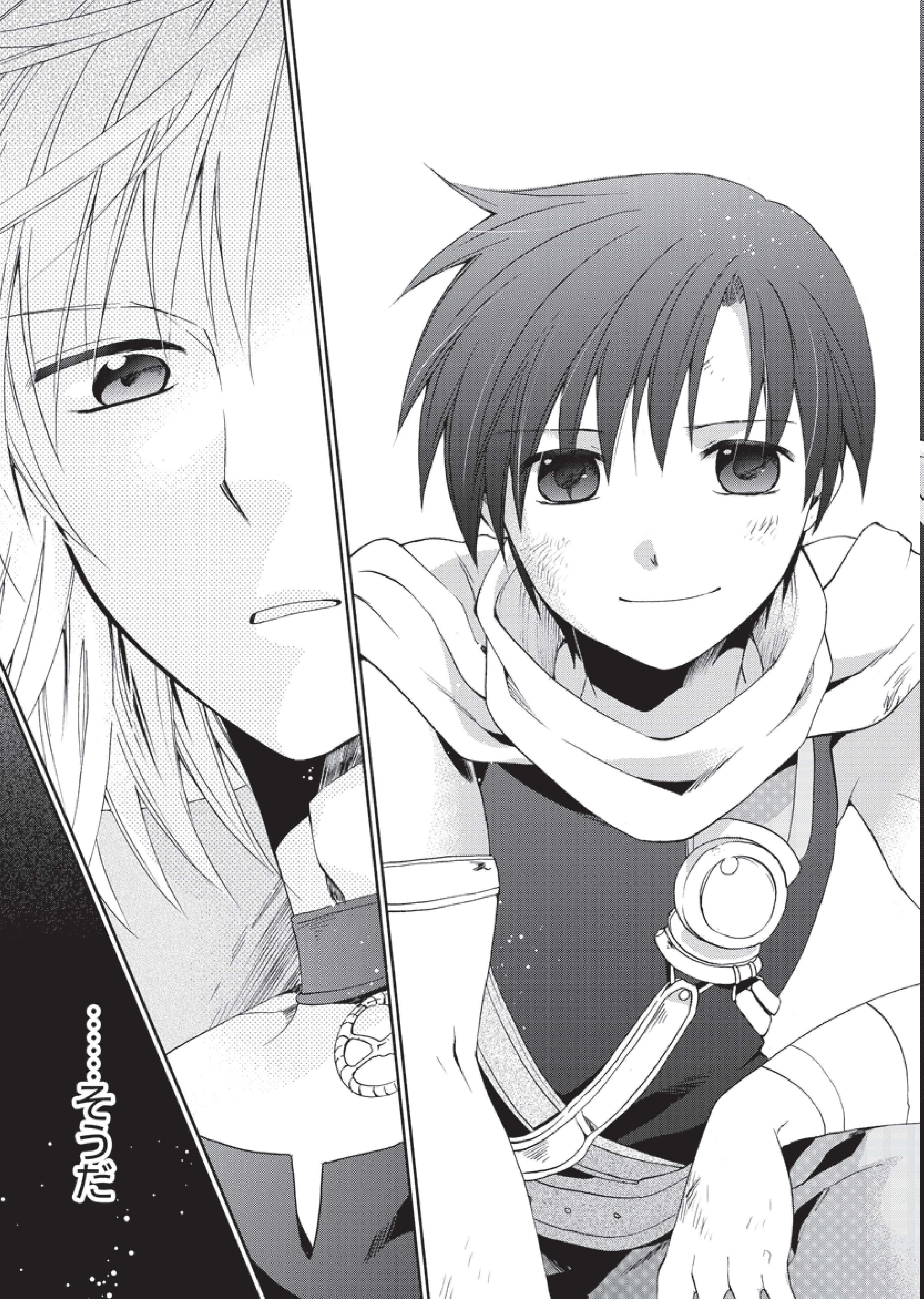
カリンは特別だ!!
あんな人間がそう簡単にいてたまるものか！
だからこそ人は問われなければならない！
その価値を——…
そして

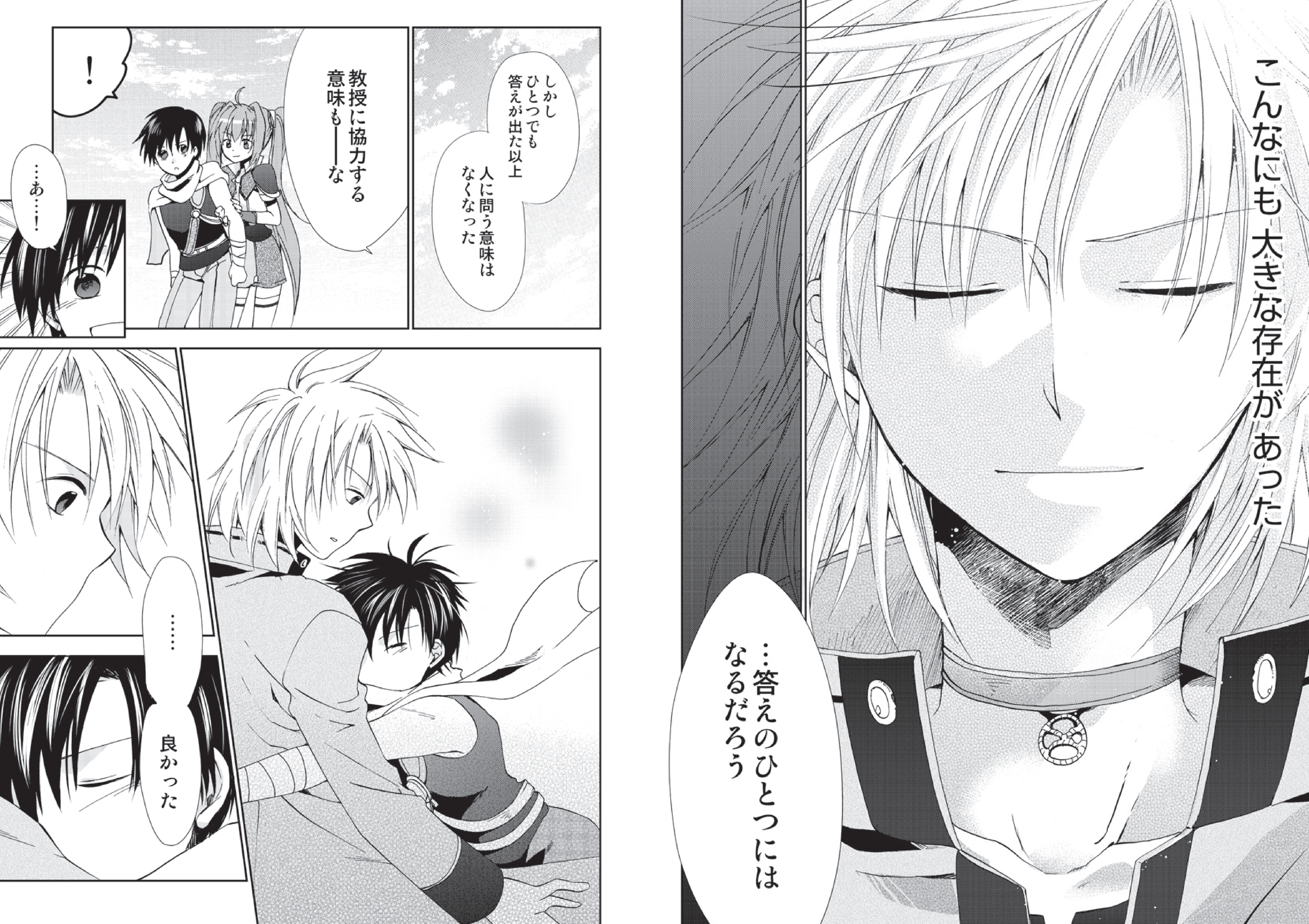

カリンという
尊い犠牲に
値する
存在なのかと
いうことを…!!
…それは
僕が
証明して
みせるッ…!

姉さんを
犠牲にして
生き延びた
弱くて
嘘つきな
この僕が…
エステル達と
出会うことで
自分の
進むべき道を
見つけられた!
レーヴェのいる
ここまで
辿りつくことが
できたッ!!
……
人はっ…


人は人の間にある限り
ただ無力なだけの存在じゃないッ!!


カラー
……
ガラ
……
レーヴェ…
僕の出した答えは
レーヴェの求める答えに…
ならないかな…？
──俺の求める答え…


俺が求める
カリンの
犠牲に値する
価値――……

……そうだ

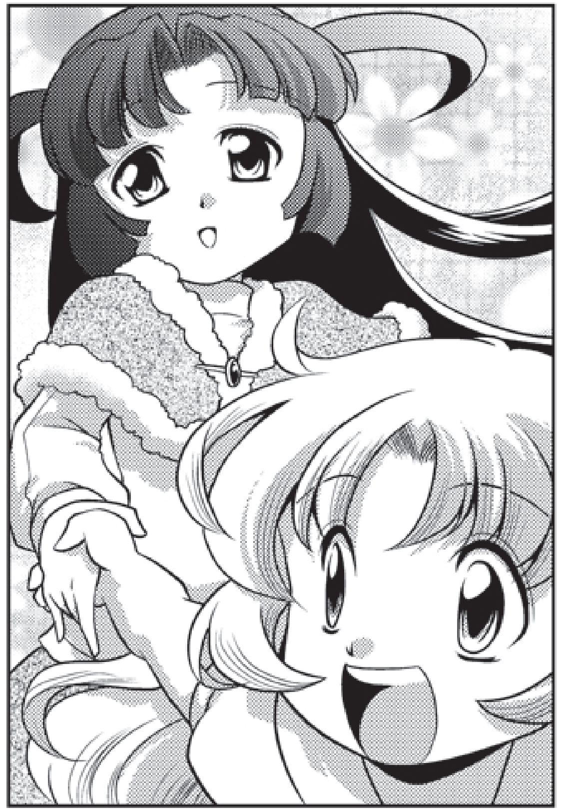

こんなにも 大きな存在があった
…答えのひとつにはなるだろう
しかし
ひとつでも
答えが出た以上
人に問う意味は
なくなった
教授に協力する
意味も——な
!
…あ…!
……
良かった


レーヴェが…
戻ってきてくれた…!!
想像もしていなかった


成長したお前をこうして抱きしめられるなんて
エステル・ブライト
お前には感謝しなくてはな
あっ…
あたし!?
ヨシュアにせよレンにせよ俺にできなかったことを軽々とやってのけた
礼を言う
えへへ…
ありがとう…レーヴェがいてくれたら
教授にも勝てる気がするよ…!
レーヴェ
フフ…


FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ　脚本：田沢大典
もうひとつの
『空の軌跡』が始まる――
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円（税込）
ISBN:978-489610-224-6
「英雄伝説 空の軌跡」の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの「空の軌跡」の物語が始まる！　©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp





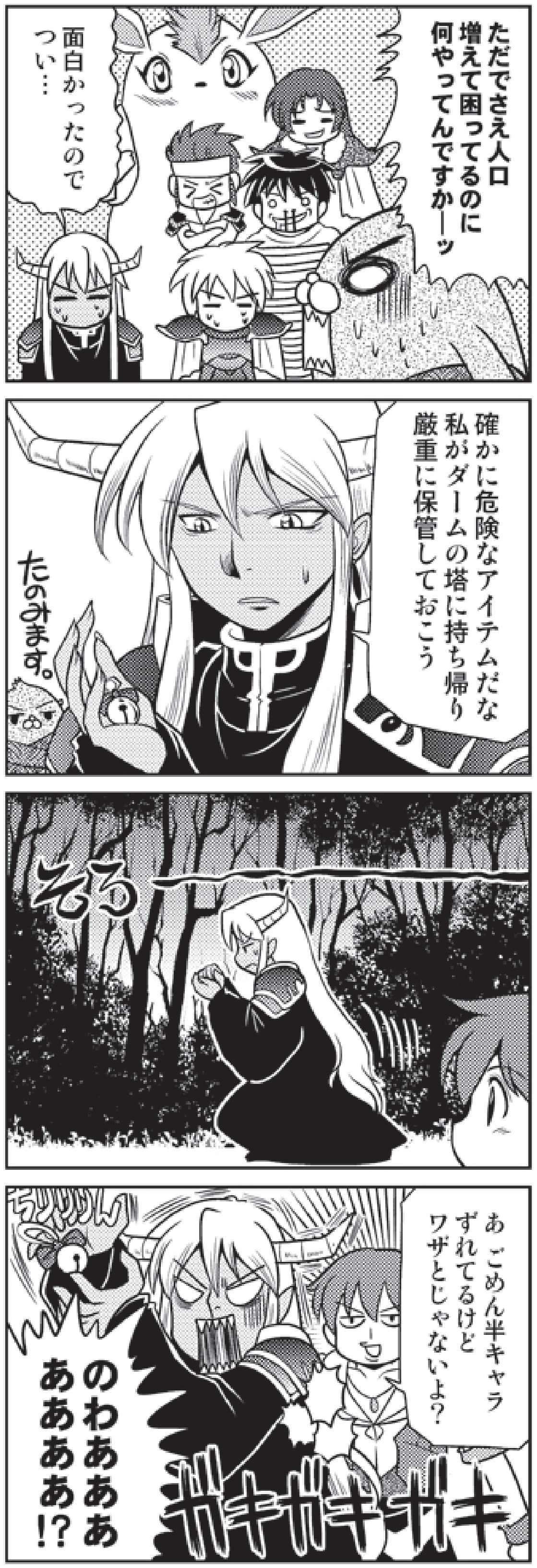
みんな集まれ！ファルコム学園

新久保だいすけ

アリオスとぱっぱらパラダイス



キケンな鈴



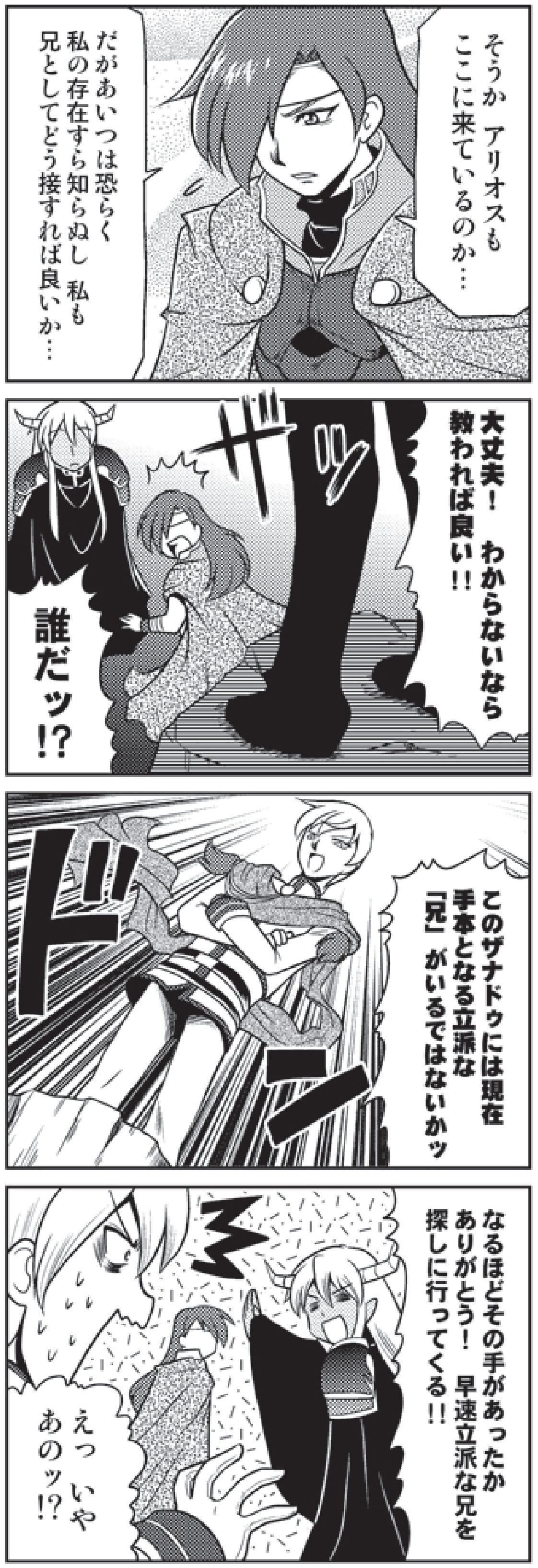
継承者ジード



年の差



兄に学べ



兄の才能



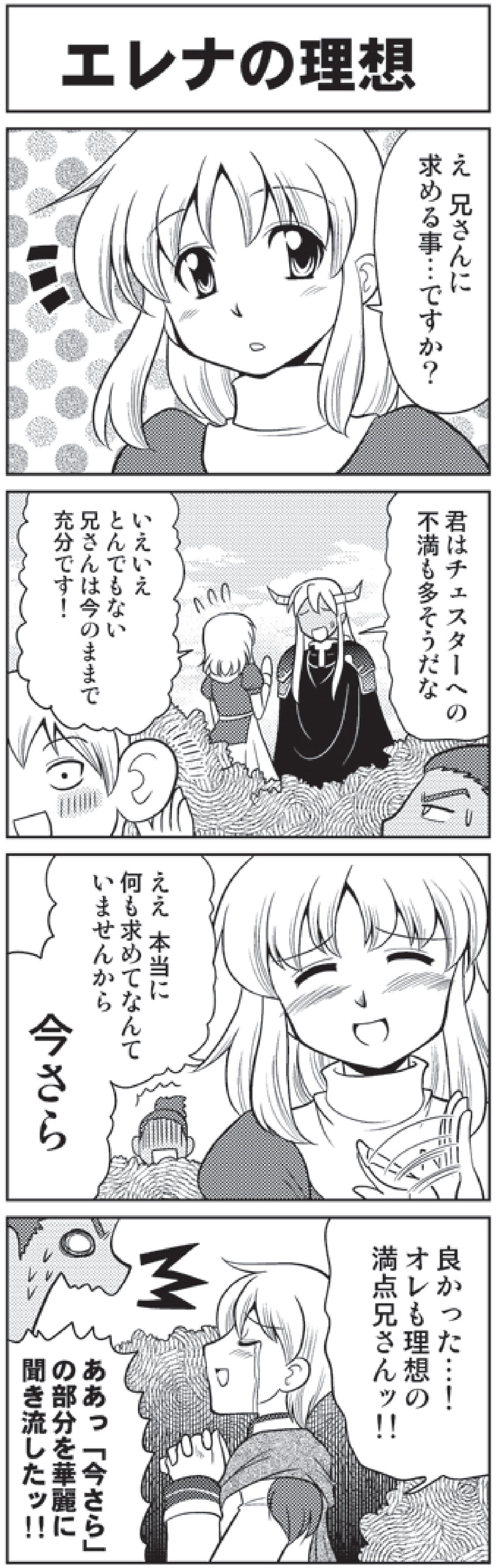
兄貴達に聞いてみた




リルルの願い
じゃあ 言いだしっぺの お前の妹から 聞いてみような
おーい
ぐぬぬぅ…
「あにのじょうけん」?
うーんそうだな 例えばお兄さんにして もらいたい事とか?
リルルはね! お兄ちゃんと一緒に ごはんたべたい
し 食事!? そんな事でいいのか?
あっ
ぱ
いやもっとあるだろ 一緒にお風呂とか お医者さんごっことか!!
ねぇ こういう時 警察と病院 どっち呼べば いいと思う?


兄貴と黒
ああ? 兄貴に 求める事!?
そりゃあるぞ ありまくりだ!!
しかし どれか一つに しぼるとしたら…
やっぱりあの服だな いつも黒ばっかりで 恥ずかしいったらねェ!!
漆黒こそいいよね
別にいいじゃない 自分が着る わけじゃないし
ハァ!? バカかお前
着ることに なってるだろ 最終的に!!
見ろ!
むしろ未だに お下がりもらってる アンタの方が恥ずかしいわ


兄貴達の悩み
気を落とすなチェスター オレも貴様と同類だ 気持ちはよくわかる
お前は ムスタファ…
病弱な妹かと思いきや 病が治れば超怪力娘で 気がつけば 俺がオマケ扱い…!!
ぶぅーーーん
おお…ムスタファ 我が同志よ!!
え…お兄さんに求める事? 特に何もありません
私にとって今の兄さんが 理想の百点満点です♪
嘘つきィィ――――!!
ブレイブびんた


エレナの理想
え 兄さんに 求める事…ですか?
君はチェスターへの 不満も多そうだな
いえいえ とんでもない 兄さんは今のままで 充分です!
ええ 本当に 何も求めてなんて いませんから
今さら
良かった…! オレも理想の 満点兄さんッ!!
ああっ「今さら」の部分を華麗に 聞き流したッ!!

兄貴とモラル



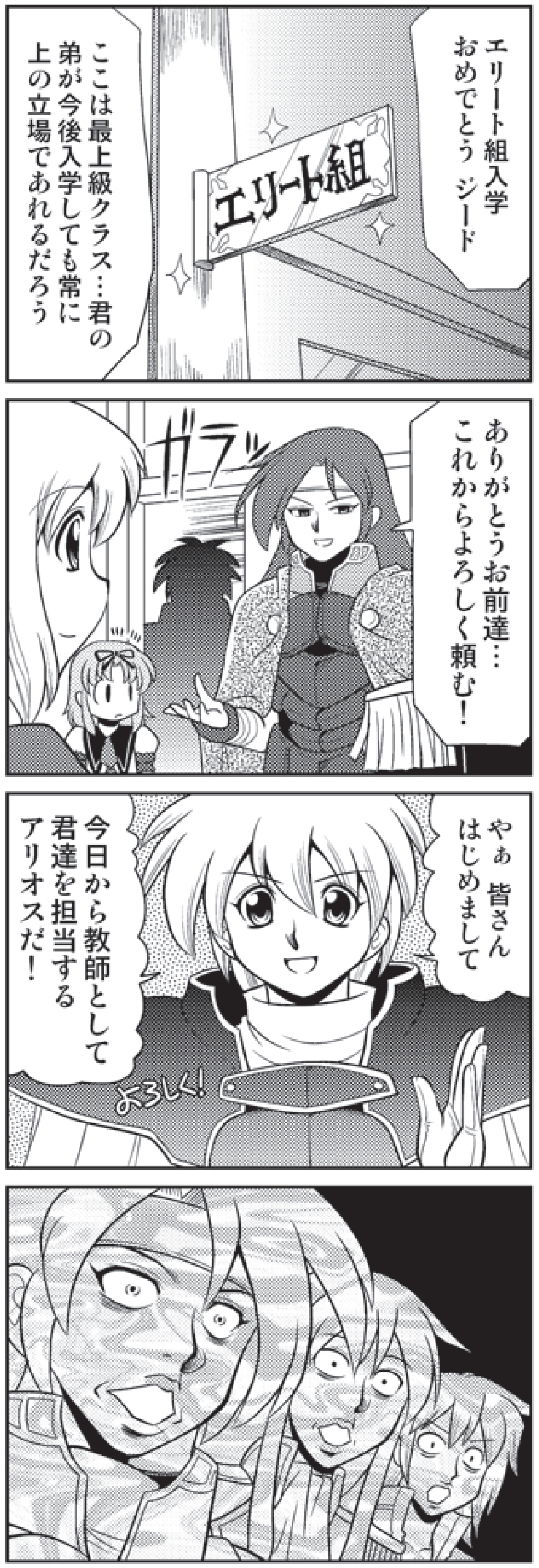
面倒を見る闘神



兄とは



上の立場



創業者の加藤が「いつまでもうちだけが、このままだと思うなよ」と言ったのを覚えています。 ——近藤季洋

FB ファルコムBOOKS



『月刊Falcom magazine』誌上に掲載されたロングインタビューを完全収録。社長・近藤季洋や日本ファルコムのゲームミュージックを演奏するjdkバンドのボーカル・小寺可南子など、ここでしか読めないファルコムの『今』が満載！

- 日本ファルコム代表取締役社長：近藤季洋
- OVA版「英雄伝説 空の軌跡」アニメーション監督・演出家：橘正紀
- OVA版「英雄伝説 空の軌跡」脚本家：上江洲誠
- ファルコムjdkバンド ボーカル：小寺可南子　ほか

日本ファルコムの『今』と『これから』がこの1冊に！



Falcom Long Interview
ファルコムロングインタビュー

全国書店にて大好評発売中!!

価格：1,155円（税込）
ISBN:978-4-89610-232-1

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

FB ファルコムBOOKS

目指せ！ファルコム一番星!!

開校御礼！



何がどうしてこうなった!?『月刊Falcommagazine』でお馴染み、日本ファルコムの歴代人気キャラクターたちが繰り広げるドタバタ四コマコミックが満を辞して登場。新久保だいすけが描くトンデモな学園生活がスタート！





みんな集まれ！ファルコム学園①

著者：新久保だいすけ

価格：893円（税込）
ISBN:978-489610-245-1

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

英雄伝説 空の軌跡
〜リベール王国スナップショット〜

第6回『瞳にハイライト！』

著：はせがわみやび

1.

ドロシー・ハイアットは好奇心の塊である。

それは記者であるナイアル・バーンズとて同じなのだが、厄介なことにドロシーには怖いものがなかった。

幽霊、と聞けば、「面白そう」と言ってカメラを構えるような性格なのだ。

だからこそ、見えるモノもあるのだけれど……。

※

「なあんで、俺が撮るとこうなるかなー」

ナイアルは写真を指ではじいた。

ひらりと机の上に落ちた一葉は、ひとりの娘を映したもの。

彼女の名は、ドロシー・ハイアットというのだが……。

「ただいまー」

噂をすれば影。ホテルの部屋の扉を開けて当人が帰ってきた。

「おう、ドロシー」

「今、戻りました。取材は進みましたか、ナイアル先輩」

「いやまったく」

前市長の逮捕というスキャンダルに端を発するルーアンの市長選挙は、対立する二候補の激しい戦いになっており、今のところ趨勢は五分。どちらが勝つかわからない状況だ。

取材対象を絞るわけにもいかず、ナイアルはやや疲れ気味だった。記事のほうもさっぱり進まない。

「……すらんぷですかぁ？　おや、それは何でしょう？」

しまったとか、待てと、声を上げる間もなく、ナイアルの傍に駆け寄ってきたドロシーが写真を摘みあげる。

「ああ、これは。この前の打ち上げでナイアル先輩が酔っぱらったときにわたしのポチくんを奪って撮った写真ではないですか」

「その丁寧な思い出しっぷりは、絶対嫌味だろ」

「ええまあ」

「否定しろよ！」

「オーバルカメラのオート機能を使ってさえのこの手ぶれっぷりと、生気を失ったゾンビのような顔で写された当人としては、これくらいは言ってもよいかと」

「う……まあ。すまん」

そうなのだ。

ナイアルは文章を書くのが本業であってカメラは本職ではない。目の前にいるリベール通信社始まって以来の天才カメラマンと呼ばれるドロシーには及ぶべくもない。

とはいえ、下手にもほどがある、とナイアルは毎度思う。

まさか、「ゾンビみたいな顔」とまで言われるとは思わなかったが。自分の顔だぞ、それ。

「おまえさんが撮ると、妙に生き生きして写るよな」

「ポチくんへの愛情の差です」

「カメラ愛の差だけとは思えんのだが。なんか、コツとかあるんじゃないのか？」

ポチくんってのは、愛用しているオーバルカメラにドロシーが付けた名前だ。

「まあ、多少はありますよぅ」

言いながら、片腕に抱えていた紙袋をテーブルの上に置いた。袋の口が開いて、写真の束が顔を覗かせる。

そういえば、焼き付けた写真があがってくるから取りに行くと言って出たのだった。

一枚を選んでナイアルのほうへと向ける。

「これとか」

写真は制服の少女三人を写したものだった。

ジェニス王立学園の生徒たちだ。

ホテルのあるルーアンの街から半日ほど歩いた距離にある全寮制の学園で、良家の子女も多く集まる学校だった。国内での知名度も高い。

つい先日、ドロシーは、その学園からやってくるという『白い影』を追って、エステルという名の遊撃士の少女とともに訪れたのだ。

「本当は、その前の学園祭の時期に訪れたかったんですよ

ねぇ」

「ほう」

「飾りたてられた校舎や寮を見てみたかったですし、お姫さまの格好をしたヨシュア君を写真に撮りたかったですー」

「お、おう」

撮られる当人の気持ちになると、来ないでくれと言いそうな気もするが。

「残念です。次の機会に期待！　でしょうか」

ヨシュアが聞いたら嘆くだろうことを、さらりと言っていた。

「そ、それより、こっちの写真だが」

三人娘の写真を見る。

「体育系と文系とお洒落系といった感じだな」

「三人とも可愛いですよぅ」

「可愛くないとは言ってねぇ」

「なるほど。先輩は制服フェチでしたか」

「ちげえ！　人聞きの悪いことをぬかすな！」

同じ制服を着ているからこそだろうか。写真の中の三人は個性の差が際だって見えた。仲良く肩を並べ、三者三様のポーズをして笑顔で映っている。

ナイアルが写した写真と、明らかに違う。

いったいどこが……。

「たとえばですね、ほら、ここです」

ドロシーの細い指が三人娘の瞳を指した。

「ん？　確かにちがうな。んっと」

「瞳が空の色を反射して光っているでしょう？　いわゆるハイライトってやつですねー」

なるほど、そのとおりなのだった。

瞳の部分だけ拡大すれば、おそらく青い空が映っているにちがいない。

対して、ナイアルの撮った写真はといえば――。

「目にハイライトがねぇな」

「だから、死んだ魚の目みたいなんですよぅ。いわゆる、デビルフィッシュアイですね」

「それを言うなら、デッドフィッシュだろ」

悪魔にするなってーの。だから自分の顔だろうが。いいのか？

「てか、その言い回し正しいのかよ」

――いまいちコイツの専門用語は信用できねぇ。

「とにかくですねー。屋内なんだから、相手に導力灯のほうを見てもらうなり、フラッシュを使うなりしないと」

――話を逸らしやがった。

後に続くカメラ技法の説明をナイアルの脳は聞き流した。

どうせ聞いてもわからない。

しゃべり疲れたドロシーが水差しを傾けるタイミングで、ナイアルは口を挟む。

「で、今からそいつを届けに？」

「はい。といっても、必要なのはこの――」

言いながら、一枚の写真を見せてくる。

「こいつはランチか？　えらく豪勢だな。量は少なめみたいだが」

「お嬢様プレートって名前のランチです」

皿の上に乗ったセットランチの写真だった。

「ひゅう。お嬢様、ときたか。さすがはジェニス王立学園ってところだな」

「食堂のメニューを、白黒イラストから総天然色の実物の絵にしたいそうで」

「そこは素直にカラー写真って言えよ。おばあちゃんか、おまえは。……うまそうに撮れてるじゃねーか」

「先輩が誉めるなんて、胃腸の調子でも悪いんでしょうか」

「いや俺だって誉めるときはちゃんとだな」

そんなに鬼先輩と思われているのだろうかと、ナイアルは内心複雑な気持ちだ。

いや、そんなことよりも心配なことがあった。

「これから学園までひとりで届けに行くつもりか？」

こくりと頷く。

「先輩はお忙しそうですし」

「王立学園までって、あぶなくねーか？」

「手配魔獣は遊撃士さんたちによって退治されたばかりですし、街道から外れさえしなければ大丈夫かとー」

「外れなければな！」

「信用してください」

「したいが、できねーな」

ツァイスでほけっと街道を外れて魔物に絡まれたのはいったい誰だったか。後で話を聞いて、ナイアルはとても焦ったのだ。

「古い学園だからな。旧校舎には魔獣が出たって話だし、幽霊だってほんとに出ないとは限らねえぞ」

「そ、それは……おっかないですね！」

「瞳をキラキラさせながら言うんじゃねえ！」

「もし出たら、今度こそ絶対撮ってきますから！」

「あぶねえから、気をつけろって言ってるんだよ！　いいか？　誰も付いていけねえんだから、自重しろよ、自重！」

「しくしく」

口では泣きまねをしつつ、ドロシーはうきうきと旅の準備を始めた。

――言い出したら聞かねえのはお互い様か。ほんとにこいつは怖いもの知らずで。せめて街道を付き添ってくれる遊撃

士でもいねえか、問い合わせてみるとするか……。

ナイアルはこっそりとため息をついてしまう。

かくなる上は——。

学園に行っておとなしく写真を渡すだけで帰ってきてくれることを空の女神エイドスに祈るのみだ。

そう思いながらもナイアルは、ドロシーは歩いた先から事件に巡り合う体質じゃないだろうかと、疑いを捨てきれない。

——こいつの好奇心を刺激するような事件が起きなきゃいいんだが……。

2.

半日後——。

夕焼け空を背景にして、ドロシーはジェニス王立学園の門を通り抜けた。

——まったく先輩は心配しすぎですよぅ。

心の中で独りごちる。

街道に危険なんてなかった。

道中で魔獣に絡まれることもなく、学園に至る直前までヴィスタ林道を同行してくれた遊撃士の人だってあまりに安全だったので拍子抜けしたくらいだ。

いや——正確には一度だけ魔獣を見ている。

学園から十セルジュほど手前の林道で一頭のウリボアと出くわしたのだ。猪に似たその魔獣は気性が荒く、目についたものすべてに突進してゆく性質をもっている。

姿を見たときは口の中がカラカラになるほど緊張したのだけれど。

そいつはドロシーたちに目もくれずに、林道を横切ると、山のほうに向かって走っていってしまった。獲物を追いかけている最中だったのだろう、と遊撃士のおじさんが言っていた。拍子抜けしたのって。

起こったことと言えばそれくらいで、日の落ちる前にドロシーは学園に辿りつけたわけだった。

門を越えて、敷地の東のほうへと歩いてゆく。

夕映えに赤く染まる本館の右手に、二階建てのクラブハウスが建っていた。その建物の一階が食堂になっている。

中に入ると、カウンターにいた給仕係のおばさんがドロシーを見つけた。

「あら、あんた」

「こんにちは、デボラさん。写真ができあがりましたよー」

鞄から出した写真を見せる。

「早かったわねえ。あらまあ。綺麗に撮れていること。すごいね、あんた。さすがはプロだよ！」

手放しの褒めようがドロシーにはちょっと照れくさい。

体温がわずかに上がってしまう。

「あ、あの、いちおう確認をお願いします」

チェックのためにデボラが食堂のメニューをカウンターまでもってきた。

置かれた紙片に視線を落として、ドロシーは「おや？」と思う。薄手の上質紙に飾り文字を使って書かれたメニューは、細ペンで描かれた料理の絵が添えられていて、前に見たときもおいしそうだなと思ったものだが……。

「あれえ、アイスがないの？」

ドロシーの背後から可愛らしい声がかかった。振り返ると、王立学園の女生徒がひとり、ドロシーの肩越しに伸びあがるようにしてメニューを見つめていた。

見つめる先のメニューには、彼女の言ったとおり、ロイヤルジェラートのお品書きを隠すように付箋が貼ってあり、『品切れ』と上から書かれている。

「品切れって、ほんとに一個もないわけ？」

と、疑わしげな目でデボラを見つめている。

——あれ、この子ってば。

その少女は、つい半日前にナイアルに見せた写真に写っていた子だ。仲良し三人娘のひとり。ナイアル先輩が『お洒落系』と評していた子だ。制服ではなくまるで衣装のような可愛らしい服を着ていた。もう夕方だし授業は終わっているのだろう。この子の名前は確か……。

「アリスちゃん、あのね」

「どこかに一個くらい隠してあるんじゃないの？」

「ど、どこにも隠してやしないよ。それに、アリスちゃん。もうすぐ夕食の時間だよ？」

「甘いものは別だから大丈夫！」

「そう言って、みんな乙女の秘密を増やしていくんだよ……」

デボラの言葉に、ぐさり、と心臓に矢を突き刺されたような仕草をしてしまう。

アリスと——ドロシーと。

「あんたたちね……」

「し、仕事の後にはですね。疲れた身体には甘いものが必要でして……」

「そ、そうよ！　そうなの。勉強に疲れた脳は糖分を必要としてるんだってば！　食べれば頭もすっきり眠気もふっとぶってもんよ！　ね、そうよね。おねえさん！」

「そ、そうです。そうですよぅ！　そのとおり！」

「あたしたちとっても気が合いそう！」

「ですですー」

「あんたたち……言って欲しいのかい？」

「え」

「う」
「太るよ、と」
「「言わないでぇえええ！」」
ドロシーとアリスはきれいなユニゾンで悲鳴をあげたのだった。

3.

「ミルクがなくなっちゃったんだよ」
と、カウンターの向こうでデボラが肩をすくめた。
「うちのは自家製だからさ。作り置きがなくなると、入荷待ちってことになるね」
「ミルクなんてどこにでもあると思うけど」
アリスの言葉に、デボラが首を振る。
「ダメダメ。ロイヤルジェラートにはとびきり新鮮なミルクを使うってのが大事なんだからね！ とれたての卵と新鮮なミルク。それが美味しいアイスクリームを作る秘訣だよ！ 明日には入ってくるから我慢しておくれ」
「残念ですー」
ドロシーとしては職人気質もわかるのでおとなしく頷くしかない。
まあ、ロイヤルジェラートならば王都の本社に帰れば食べられるし。アリスは不満そうな顔をしたままだったけれど、ないものは仕方ない。
写した写真でも見て心を慰めるしかなかった。お腹はちっとも膨れないけれど。
「おねえさん、カメラマンなの？」
カウンターに広げたままの写真を見てアリスが言った。
「あ、はい」
「あれ？ そういえば、この前あたしたちのこと撮ってたひと？」
そうですよ、と頷く。
覚えていてくれたようだ。
先輩記者にも見せた写真を封筒から取り出してみせた。
「あ、これこれ。パープルやモニカと一緒に撮ったやつ！」
「はい。お会いできたらお見せしようと思いまして。あ、デボラさんのも、こちらに」
前回訪れたとき、先生や生徒たちの写真を三十枚ほど風景を五十枚ほど写している。それらはひととおり焼き付けて持ってきていた。
「はあ。これがあたしかい。うまく撮るもんだねぇ」
「ホント！ まるで別じ……あ、ちがうってば」

食事の盛りを減らされたいのか、そんな視線で睨まれていた。
「ま、でも、十歳は若く見えるね！ これなら、学園の生徒にも混ざれそうだよ！」
「え……」
それはどうだろう？ という言葉を慌てて呑み込む。
「でも、ほんとにきれい。食べちゃいたいくらい」
料理の写真を見ながらアリスが口許に小さな指をあてた。
「お腹減ってきちゃったなぁ」
「間食は控えたほうがいいよ。ドロシーさんの写真で我慢しな」
「余計お腹が空いちゃうってば！」
喜んでいいのかわるいのか。
カメラマンとしてはうれしいけれど。
「ねえねえ、おねえさん。お仕事はもう終わり？ 写真、友だちにも見せてあげたいんだけど」
「あ、ええと。まだ、こちらから選んでいただかないと――」
「選ぶだけでいいんだろ？ 戻ってくるまでに見ておくよ」
そう言われて、ドロシーはお願いしますと頭を下げた。食堂のメニュー用の写真とデボラを写したものだけ置いて、アリスに付いていく。
「そういえば、食堂に何か用事があったのでは？」
「生徒会室のほうにね。会長さんに会いに行ったんだけど、いなかったの。これ、学園祭で着た衣装で、今度これを着てモデルをするのよ」
「モデルですか。すごいですねぇ」
「すごくないよ。うちの美術部のだもん」
アリスが着ている服は、元々美術部に所属している生徒が作ったものらしい。終業後に時々引っ張り出して着ていたところを見つかってしまい、モデルを頼まれた、という話。
衣装みたい、と感じたドロシーの感想は的を射ていたわけだ。
アリスは謙遜するけれど、同性の目から見ても、カメラマンとしても、可愛らしい衣装を着こなしていて、モデルにしたいという気持ちがよくわかった。
頭の左右でお団子にした髪型もとても似合っている。
「あたしだけだと恥ずかしいし、どうせなら、他の人にもモデルさせちゃおうかなって。それで、学園祭の時の衣装を貸してもらえるか訊きに行ったんだけど」
生徒会長は不在だったわけだ。
「会長さんたちが便りにしていた人がひとり休学しちゃって……。最近、忙しいみたいなんだよね」
「そうなんですかー」
女ふたりで話をしているとあっという間だ。女子寮へと辿

りつく。
　二階建ての寮は、庭を挟んで男子寮と向かい合うように建てられており、王立学園の歴史を感じさせる造りをしていた。具体的に言ってしまえば古めかしい。いわくありげというか。
　この前、アリスたちの写真を撮ったときは、彼女たちの部屋の中だった。一階の奥だったはずだ。
　四枚扉の正面玄関をくぐる。左右に伸びる廊下と二階へと上がる階段が目に入る。
　廊下は市松模様のタイル張り。左手の空きスペースには、来賓用だろうか、椅子とテーブルがいくつか置いてあった。
「二階はぜんぶ三人部屋だけど、一階には、四人部屋から個人部屋まであるのよ」
　アリスが言った。
　廊下の片側にずらりと並ぶ扉はみな同じ形をしていて、飾り付けなどもされておらず、それがなんとなく学校っぽい雰囲気を醸している。
「この前はアリスさんたちのところしかおジャマしませんでしたけれど、改めて見ると部屋がいっぱいありますねー」
「玄関くぐったところから見ると、二部屋ぶんの扉しか見えないもんね」
「わたしも二部屋しか記憶してませんでしたから」
「やだなあ、もう！　そんなはずないってば！」
「ですよねー」
　廊下の端の扉を開けて、アリスが中へと声をかける。
「ただいまー！」
　しん、と静けさが返った。
　人の気配はあるのだけれど、返事はない。
　角部屋だから、左手が窓になっていた。
　明りの点けてない部屋に、かすかな黄昏の光だけが差し込んでいる。
　奥のテーブルに背中を向けて座っている生徒の姿が見て取れる。
　振り返らずに、覆いかぶさるようにして机に向かっている。
　声が聞こえてきた。
「ふふふ……。そう、そのとき老婆は壁に向かって囁いたの……」

4.

　地の底から響いてくるかのようなおどろおどろしい声だった。
　後ろ姿はカチューシャをつけたふつうの女生徒なのに。
　アリスが壁際のスイッチを入れると、導力灯がちかちかとまたたいてから点った。
　だが、背中を向けた少女は明りが点ったことにも気づかないみたいだ。
　小声で独り言を言っている。
『リアや……そこにいるのかい？』と。真っ白く塗られたばかりの壁に向かって老婆は囁き、周りの人々は老婆の気が狂ったのかと思う。そのとき、ガリガリ、という微かな音が響いて……。ええと、そう。『爪で引っ掻くような』と。壁の『中から』そんな音が聞こえてきて、それからそれから。そうだわ！　猫の鳴き声が――いえ、だめ！　どこかにあったもの、そんな話。考えて、考えるのよ、パープル。ここが頭の使いどき……」
　ぶつぶつとつぶやきながら、机に向かっている。
　怯えた表情を浮かべていたアリスが、げんなりとした表情に変わった。
「閃いた！　血よ！　真っ赤な血が白い壁からじわっと染み出してくるの！　次の瞬間に、音を立てて壁が剥がれ落ちる！　崩れる土壁。倒れ込んでくる血まみれの死体。あがる悲鳴、飛び散る血しぶき、空の女神エイドス様を祭っている校内礼拝堂は一瞬にして阿鼻叫喚の地獄絵図！　きゃああ！
　素敵だわ！　これこそホラーだわあああ！」
「いーかげんにしてよ、パープルったら！」
　ずかずかと近づいて行ったアリスが、机の上の原稿用紙をひったくった。
「ああ、だめ待って。書くまで待ってぇ。消えちゃう。思いついたイメージが消えちゃうから書き終わるまで待ってぇえ！」
　叫びながら涙まで流していた。
「あの……アリスさん」
　いたたまれなくなってしまった。だって、ドロシーにも覚えがありすぎて。
　執筆中に声を掛けられても返事を返せるナイアル先輩がうらやましい。事件記者は切り替えが早いのだろうか？
「もう！」
　アリスが原稿用紙を返すと、パープルと呼ばれた少女は、二度と渡すまいとばかりに紙の上に覆いかぶさってペンを走らせる。
　腕を組んでアリスは書きあがるのを待っていた。
　その間に、ドロシーは部屋の中を見回した。
　四人部屋とあって、けっこう広い。
　ベッドが左右に二つでぜんぶで四つ。扉に掛けられた名札は三つだったから、ひとつは使われてないのだろう。シーツ

に皺ひとつ寄っていない。机も四つ。そのうちのひとつがパープルの座っている奥の机で、彼女の机の脇にだけは本棚が置いてあった。

どうやら、このパープルという少女は本好きのようだ。そういえば、ナイアル先輩はこの生徒を『文系』と評していた。

大きめの衣装箪笥が二つ。制服が標準の彼女たちだから、二つでも賄えるということなのか、それとも余計なものまで持つなという学校の方針なのか――考えているうちにパープルが書き終えたようだ。

のろのろとだがパープルの脳は現実世界へと復帰を果たし、徐々に焦点の合ってきた瞳でドロシーのほうを見ている。

「どなた……？」

「ドロシーさん」

「どこのドロシーさん？」

「あのねえ！　もう、パープルったら、ほんと書いてるときのあんたって、ロクデナシのデクノボウになっちゃうんだから……」

「うーん。でも、どこかで見たことがある人だっていうのはわかるんだけど」

「あの……リベール通信社のカメラマンをしております、ドロシーです。先日、お写真を撮らせていただきました」

アリスたちを撮った写真を見せる。

ああ、とパープルの顔に理解の色が広がった。

「それにしても、パープルったら、今度は何を書いているのよ。おっかないったら。それに、明りも点けないでやってると目を悪くするわよ？」

「照度と視覚の衰えは関係ないっていう最近の研究もあるけど？」

反論するパープルは、アリスにじろっと睨まれて口をつぐんだ。

「はい。心配かけてごめんなさい」

「わかればいいの」

「小説を書いてらっしゃるんですかぁ？」

ドロシーはとりなすように質問する。

はい、とパープルは言った。

「わたし、小説家になろうと思っているんです。今回は、学園を舞台にした恐怖小説を書いてみようと思って。エイドス様の前で愛を誓ったカップルが校内礼拝堂で悪霊に魅入られて次々と殺されていくっていう……」

「あ、あんたねー。罰当たりにもほどがあるわよ！」

「えっ。そんなことないですよ。現実には起きないと思っているからこそのフィクションですからね。それにこれ、エンターテインメントですし」

言い合うふたりに水を差すように、のほほんとした声が割り込んだ。

「なんだいなんだい。何を揉めてるんだよ？」

振り返ると、いつの間にか部屋の中にもうひとり増えている。

仲良し三人娘の最後の三人目だ。『体育系』の彼女。部活動を終えたところらしく、体操着を着ていて、なぜか肩当てのようなものをつけている。

弓……の武具だったような気もする。

「あ、モニカ！　聞いてよ、またパープルったらロクでもない話を考えてるのよ！」

「ちょっと、ロクでもないとかないでしょ。ホラーを馬鹿にしないで！」

「はいはい。そこまで。お客さんの前でなにやってんのさ」

ハキハキした口調で言った。

赤毛の、背の高い少女だった。後から思えばこのときに気付くべきだった。

モニカと呼ばれた彼女は、口調とは正反対の少し警戒するような目でドロシーを見ていたのだから……。

5.

モニカに促されてアリスもパープルもドロシーの存在を思い出したようだ。わずかに頬を赤らめつつモニカにドロシーを紹介してくれた。

「へえ。カメラマンさんか」

「ドロシーさんってばとっても写真が上手なのよ。ほら見てよ。あたしたちだって三割増しくらい美人に写ってるって思わない？」

アリスの言葉にモニカが頷きを返した。

「確かによく撮れてるな」

「上手ですね。こちらの旧校舎なんか、暗く物悲しい雰囲気が良く出ています」

どうやら風景写真の一枚が気に入ったようだ。

「今にも隠れている悪霊が姿を現して学園を煉獄へと変えてしまいそうです」

「や、やめてよ！　そういうこと言うの！」

「あー、確かに何か出そうだよな」

「やめてってば！　夜中にトイレに行けなくなったらどうすんのよぉ！」

すっかり涙目でアリスが口をとがらせる。

「あら？　でも、壁に塗り込められた少女の話っていうのは、リベールに伝わる昔の伝説を元にしたのよ？　つまり、実際にあったのかもしれない話なわけ」

「へー、そうなんですかぁ」

とドロシー。すっかり聞き役に回ってしまっていた。

「そうなの。おっかないわよね」

「で、伝説でしょ！　絶対そんなのなかったって！」

　どうやら怖がりらしいアリスは手で耳を覆って聞こえないふりをする。

　そんなアリスをからかうようにパープルは容赦なく話を続けた。

「もちろんその話は伝説よ。でも、小説は想像だけで書いちゃうと薄っぺらくなっちゃうからね。ホントを混ぜることでフィクションは生きてくるわけ。ほら、ここのくだりだけどさ――」

　原稿用紙を叩きながら声を張る。

「やめてぇー、聞きたくないー」

「この前の夜の出来事をそのまま使ってみたのね。夜中に起きたポルターガイスト」

「ぽるたーがいすと？」

　思わずドロシーは口を挟んでしまった。面白そうな事件の匂いがする。

「騒々しい幽霊ってこと。家具がガタガタ揺れたり、奇妙な音がしたりするの」

「へー」

「三日前くらいにこの部屋で起こったんです。そのときのアリスったら、もう怯えちゃって怯えちゃって」

「わ、悪いか！」

「かわいいって言ってんのよ。ま、たいていは風の音だったり、家鳴りだったりするんだけど」

「面白いです！」

「面白くない！　ちっとも面白くないってば！　ゆ、ゆうれいなんていないんだからね！」

「えー、でも幽霊は、出たばかりじゃないの。ほら、『白い影』が旧校舎をさ迷っていたっていう」

　パープルが言って、ぎくりとアリスが身をすくませた。

　すっかり顔が青ざめている。

　何かを思い出したように声を出したのはモニカだった。

「そういえば……。ちょうどその頃だね、ドロシーさんがうちの学校に来たのって。ひょっとして取材か何かで？」

「あー、えー、まあ」

「わあ、そうだったんですか！　記者が取材に来るほど有名だったんだ！　じゃあ、あれは本当だったんですね！」

　パープルが顔を輝かせて詰め寄ってきた。

　反対にアリスのほうはますます顔を青くさせている。

「それで白い影の写真は撮れたんですか！」

「そ、そうですねえ……」

　ドロシーは困ってしまった。

　いわゆる『白い影』事件については、遊撃士協会から詳しいことは話さないでくれ、と釘を刺されている。あれはどうやら幽霊ではなかったらしいのだけれど、それだけに実は幽霊よりも厄介なことになっている――らしい。

　ナイアル先輩も市長選挙が終わったら調べてみたいと言っていたけど。

　今はドロシーから言えるようなことは何もないのだ。

「あ、それよりみなさんそろそろお食事なのでは？」

　仕方なく話を逸らした。

「いっけない！　もうそんな時間なの!?」

　慌てたのはパープルで、「わたし、締切に間に合わないから、ルーアンまで行ってくる」と言って原稿を整えると身支度を始めたのだ。

　街から外れた学園には、郵便配達は日に一回しかやってこない。毎日午前に来るそうで。でも原稿の投稿は明日では間に合わないらしい。確かに明日から休日だった。ルーアンの街まで出れば王都への荷は飛行船に乗せられるから速達便を使うなら街に出るしかない。

「こ、これからですか。もう日が沈みますよ」

　心配になってしまった。

　だが、パープルは友人の馬車に同乗させてもらう予定だとかで、大丈夫だと言った。

「ぎりぎりまで待ってもらってるの。こうしていられないわ。もう出るから！」

　そう言い置いて、書き上げた原稿を抱えて部屋から駆け出していった。

「明日には戻るから～～！」

「パープルったら、もう」

　週末の外出許可は取ってあるのかしらとアリスが口を尖らせる。

「仕方ないなぁ。モニカ、食堂に行こ。ドロシーさんも」

「あ、はい」

　とドロシー。

　だが、モニカは、

「悪い。あたしも夕食はパスなんだ」

「えー！」

「アーチェリー部の合宿でね。講堂を使って三日間の泊まり込み。食事も一体感を高めるためとかいってみんなで自炊なんだよ。ああ、風呂だけは寮に入りにくるけどさ。今は着替えを取りに来たところだったんだ」

「そんなっ！　え？　じゃあ、あたし……今夜はひとりきり!?」

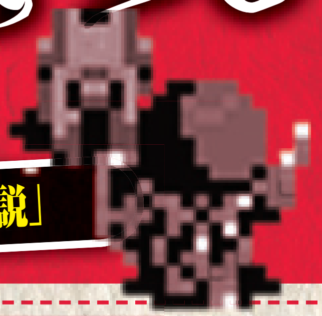
「悪いね。でもさ――」

　パープルの真似をして、からかうようにモニカが言った。

「アリスはひとりでも平気だろ？　『ゆうれいなんていないん

だからぁ』さ」
「！　！　！」
アリスが声も出せずに口を開けたり閉じたりする。
笑いながら、モニカは着替えを箪笥から引っ張り出す。
「あはは。怖かったら、布団にくるまってさっさと寝ること！　いいね！」
「モニカのばか〜〜〜〜〜！」
涙の粒を目尻に溜めながらアリスが叫んだ。
そのときにはもうモニカは部屋を出てしまっていて、閉まった扉を前にしてアリスは立ち尽くすだけだった。
くるりと振り返る。
大粒の涙がぽろりと頬を伝って落ちた。ドロシーの心臓がどきりと跳ねる。
——ああ、どうしましょう！　こんな可愛い子を泣かせてしまいました。いえ、泣かせたのは自分ではないのですけれど。
動転しているドロシーに向かってアリスが言った。
「おねえさま、お願いします。今夜はいっしょに寝てください！」
……はいい？

人生半キャラずらし



jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！

「PERFECT COLLECTION Dragon Slayer 英雄伝説」

みなさん、こんにちは！ jdkBANDドラマーのオカジです。

だいぶ寒くなってきましたが、みなさんは体調など崩されたりしていないですか？

僕は現在、この冬発売になる「ファルコム・jdkバンド ディーバ小寺可南子シングス①②」と、「イースざんまい」の制作で、てんやわんやしております。

この原稿を書いている今日だって、先程までコテカナの歌録りでスタジオで仕事しておりました。……これがまた良いテイクが録れてまして、早くみなさまにお届けしたくてウズウズしております。きっとコテカナのベストアルバムはかなり聴き応えのある作品に仕上るのでは!?と思っている次第であります。で、今回ですね、また僕がアレンジしている楽曲の元ネタが、かなーりマニアックな選曲になっております。過去にも、この曲の歌モノアレンジなんて無かったんじゃないかな？（ですよね？ ファルコムさん？）

かなり選曲には迷ったのですが、今回はこの作品の中から一曲選ばせて頂きましたよ！ドドン！

「PERFECT COLLECTION Dragon Slayer 英雄伝説」

DragonSlayer -導かれし宝冠の戦士たち- も発表間近となり、巷ではドラスレ一色の昨今。しかもなんとイセルハーサが舞台だと言うじゃないですか。え、しかもセリオスにアグニージャ!?

もう、こうなると僕はソニアの事しか考えられなくなってしまうわけで。誰だって時期的に考えてもドラスレ英伝1から選びたくなっちゃいますよね。きっと。





岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤禎央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc

さらに言えば、ドラスレ英伝は、今も尚続く「英雄伝説」シリーズの原点でもあるわけで。

しかもそれを、今やファルコム作品の歌モノでは外す事のできない、小寺可南子が歌うというのだから、なんだかもうこれは面白い事になる事間違い無し！

しかし、久々に選曲も兼ねて、この「PERFECT COLLECTION Dragon Slayer 英雄伝説」を聴いたわけですが、実に名曲揃い。楽曲数は今のゲームと比べるとかなり少ないものの、聴き応え充分です。個人的には海賊島が大好きすぎて仕方ありません。……ま、コテカナに歌ってもらうのはこの曲ではないんですけどね……(笑)。

この作品は、お馴染みのオリジナルFM音源版とアレンジ版の2枚組みのアルバムで、聞き比べるのも非常に楽しいです。アレンジ版もかなり素晴らしいデキ。

しかもこのアレンジ版のCDは、PC-8801MCという機種（当時としては珍しかったCDドライブ付PC）のドライブにマウントしながら英伝をプレイすると、なんとアレンジ音源を流しながらゲームがプレイできちゃったりしたのです。凄いでしょ!! なんだか、まるでCD-ROM2版の英伝をプレイしているかのような錯覚に陥る事間違いなし！ ……もう若い方には、なんのことやらサッパリでしょうが……分かる人だけ分かってくれればいいです、ハイ(笑)。

そんなわけで結局、どの曲をコテカナが歌うのかは謎に包まれたままの、わけの分からないコラムになってしまいましたが、とにかく、冬の小寺可南子アルバムに向けて、「PERFECT COLLECTION Dragon Slayer 英雄伝説」を聴いておくと楽しい事になると思いますよ！

「オイ、この曲を歌モノにして、しかもこんなアレンジで新譜に入れるのかよ！」というツッコミを入れずには居られなくなること受けあい。リリースをお楽しみに～！

さて、そろそろ作業に戻らねば！ 次回またお会いしましょう！

ではでは！

ファルコム楽曲4,000曲をiTunesで世界50ヶ国に配信中。
(ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが適用されたiTunes Plusでの配信となります)

iTunes配信中のコラム関連アルバム情報
[PERFECT COLLECTION Dragon Slayer 英雄伝説]
価格：3,000円
収録曲数：36曲

≪Falcom jdkバンドライブ特設サイトURL≫
http://www.falcom.co.jp/jdk/index.html

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

日本ファルコム冬コミ出店情報！

みっしぃだらけのセットも登場!?

キュートなＳＤキャラのピンズコレクション、今回のために描き下ろされた未公開イラストを使用した卓上カレンダーなど魅力的なグッズも多数ご用意。中でも『零』『碧』の大人気マスコット・みっしぃのブランケットとラバーストラップ、イラストでみっしぃが付けているアイマスクを特製巾着袋に入れたスペシャルセットは見逃せない！







豪華新商品が大集合! 1年の締めくくりはファルコムと共に!!

12月29日から31日にかけて開催されるコミックマーケット83、今回も日本ファルコムは新商品を多数用意しての出店が決定。"ざんまい"シリーズ第３弾、歴代『イース』ミュージックに新アレンジを加えた「イースざんまい」やファルコムjdkバンドのボーカル・小寺可南子が歌うボーカル曲を収録したベストアルバム、「Falcomjdk BAND Diva Kanako sings」などの新作ＣＤも忘れずにチェック！

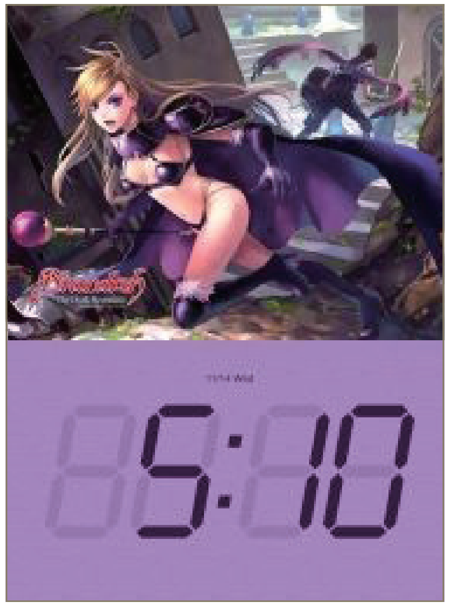


Natural Photo Clock

最新タイトルの配信が開始!

iPhone用アプリ『Natural Photo Clock 日本ファルコムキャラクターバージョン』から新たに４タイトルの配信がスタート。『イース セルセタの樹海』『ガガーブトリロジー』『ザナドゥ』『ブランディッシュ』から様々なイラストやサウンドが配信される。その日の気分に合わせてiPhoneを彩ろう。各450円(税込)。アプリ体はAppStoreにてダウンロード可能（無料）。







Falcom jdk BAND 2013 NewYearLive in NIHONBASHI MITSUI HALL

ファルコムはじめはjdkと共に!

ファルコムjdkバンド生誕25周年を迎える2013年、記念すべき１年の始まりと共にjdkバンドのライブが決定！　なんと来場者全員にボーカル・小寺可南子が描いたメンバーの似顔絵付き手ぬぐいをプレゼント予定。チケットはローソンチケットにて絶賛発売中。5800円。詳細は公式ＨＰまで（http://www.falcom.co.jp/jdk/#live07）。

イーストリビュート

5人の名手がイースの世界を描く!

日本ファルコム×星海社×4Gamer.net共同企画、「ノベライズの"新地平"」第１弾。今年で25周年を迎えた大人気シリーズ『イース』の世界で、冒険家・アドルが挑む新たな冒険を５人の小説家が描くノベライズ。橘ぱん・小太刀右京・芝村裕吏など それぞれの作家の色が生された個性的なストーリーに注目だ。12月14日、講談社より発売。1103円（税込）。





2011年10月から好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■**配信日**　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■**メインパーソナリティ**　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■**公式ホームページ**　http://www.falcom-radio.com/

第54回-第55回　遠藤綾（『英雄伝説 零の軌跡』エリィ・マクダエル役）

54-55回のゲストは、最多のゲスト出演となる遠藤綾さんが出演。３回目ということもあり、かなりリラックスした空気の中で収録が行われた。ゲストパートでは『零えぼ』発売直後ということで、『零』、ドラマCD、『零えぼ』と、多くの収録を経て感じたことなどが語られた。『出発！特務しれん課』のコーナーでは、２週にわたって、『零えぼ』で追加されたミニゲームを遊ぶことに。画が見えないのに大丈夫か!?　という心配とは裏腹に、ブース内ではすごい盛り上がりを見せていた。

▶第54回-第55回の舞台裏◀

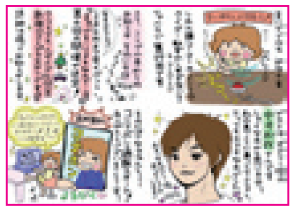
２週に渡ってプレイされた『零えぼ』のミニゲーム『コロコロみっしぃ』。キャストのみなさんもその日が初プレイで、思ったよりも難しかったため、「この面ならクリアできるかも!?」というステージを選ぶために、リハーサルでは、必死にみっしぃを転がす姿が見受けられた。

第56回-第57回　中井和哉（『英雄伝説 零の軌跡』アレックス・ダドリー役）

56-57回のゲストは、『零の軌跡』でアレックス・ダドリー役を演じた中井和哉さんが出演。兼ねてよりリスナーからの出演要望が多数来ており、過去最多のお便りとつぶやきが届けられた中での収録となった。中井さんはゲーム自体はプレイされないということだったが、演じ続けていく中での、自身のダドリー像を熱く語っていただいた。また、57回では日本シリーズ開催中の収録だったため、関西出身ながらも関東の球団が好きだった中井さんの子ども時代のエピソードを披露。

▶第56回-第57回の舞台裏◀

『出発！特務しれん課』では、『零の軌跡』のイントロクイズが2週に渡って行われたが、参加メンバーには全曲のタイトルリストだけが渡されたのみで、何が出されるかはガチンコ勝負だった。その中で全曲正解したしおりん。あまりの凄さにスタジオ内でも若干引き気味な空気に……。





今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！

Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々のイラストとコメントを毎月お届けします！



うら
ぐるみんはデモムービーが公開された時から楽しみで仕方ありませんでした。可愛らしいキャラクター達＆イースとは一味違ったアクションで、何度でもプレイしたくなる作品のひとつです。

『ぐるみん』(2004)
伝説のドリルを手にした少女・パリンが友達になったオバケ達のために敵に立ち向かうファンタジー作品。ファルコム初となる３Ｄポリゴンゲームで、可愛らしいデザインのキャラクターが人気となった。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.22

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



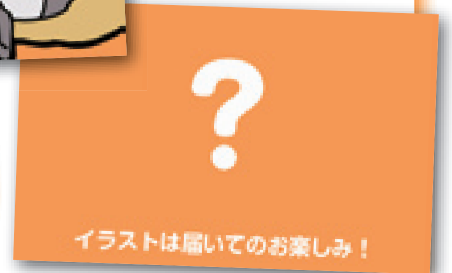
① 1名様

❶窪茶先生サイン入り『英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を』
マガジン誌上で大人気！　クロスベルの街のゆる〜い日常を描いたノベライズの発売記念としてイラストを担当した窪茶先生のサイン入り単行本を大放出!!



② 1名様

❷『ファルコムjdkバンド ボーカル・小寺可南子 サイン色紙
数々の名曲のボーカルを務めるファルコムのディーヴァこと小寺可南子さんのサイン色紙。世界に一枚しかない１点モノ！



③ 2名様

❷『零の軌跡Evolution』クリアファイル
キャラアニ購入特典で封入されたクリアファイルを特別に入手！　どの絵柄が届くかは当選してのお楽しみ!!

プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

- ●下記のメールアドレスをご記入ください。
- ●お名前（ペンネーム可）をご記入ください。
- ●右記の記事一覧から、今月号で一番面白かった・つまらなかった記事をご記入ください。
- ●ご意見・ご感想などをご自由にご記入ください。
- ●希望するプレゼントの番号をご記入ください。
- ●「vol.22プレゼント係」とご記入ください。

宛先：
件名：vol.22プレゼント係

○○○○○○○○○○
◆
面白い：
つまらない：
◆
○○○○○○○○○○
◆
1

【記事一覧】

1：『空の軌跡外伝 レーヴェ物語』
2：『みんな集まれ！ファルコム学園』
3：『ミシュラムNo.1ホスト決定戦！』
4：英雄伝説 空の軌跡
リベール王国スナップショット
5：英雄伝説 零の軌跡 〜午後の紅茶にお砂糖を〜
6：jdkバンドドラマー・オカジの
人生半キャラずらし
7：ティオのファルコムラジオ
めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏
8：FalcomFanArt Collection
9：ファルコムニュース

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp　応募締め切り **12月25日**

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。